

母の
教育

妊娠より育児まで

吉岡彌生著

始



時 220
111



吉岡彌生著

母の
教育の
妊娠より育兒まで



東京 富文館發行

妊娠より育児まで目次

婦人の衛生

(一) 生理的特徴たる月經	一
(二) 月經期と年齢	二
(三) 身體の發育と月經	三
(四) 月經の日數と分量	三
(五) 月經時の排泄物	四
(六) 月經時の異狀	五
(七) 月經時の攝生	七

月經時に心得べき衛生



- (一) 月経時は清潔にせよ……………八
- (二) 月経時の處置法……………九
- (三) 月経時には入浴するな……………二一
- (四) 月経時には精神を悩ますな……………二二
- (五) 月経時には運動するな……………二三
- (六) 月経時には冷えるな……………二四
- (七) 月経時の睡眠と食物……………二四
- (八) 最も嚴禁すべき事項……………二五
- (九) 便通をよくせよ……………二六
- (一〇) 月経に就ての處女の知識……………二六
- (一一) 月経閉止期の異狀……………二七

- (一二) 月経無き原因……………二八
- (一三) 無月経の處置……………二〇
- (一四) 月經過多の心得……………二一
- (一五) 月經過多を如何にすべきか……………二二
- (一六) 月経困難とは何か……………二三
- (一七) 月経困難時の心得……………二四
- (一八) 月経時と眼病……………二五
- (一九) 月経時と婦人病の原因……………二六
- (二〇) 月経に對する深き注意……………二七

結婚時に心得べき重大注意

- (一) 生殖器は婦人の生命……………二八

(二)結婚には此の注意が肝要……………二九

(三)必ず妊娠する方法……………三一

(四)何故子が無きか……………三一

(五)妊婦と産婆……………三三

婦人の病氣の心得

(一)婦人にのみある病氣……………三四

(二)婦人病の増加……………三五

(三)婦人身體の強弱……………三六

(四)婦人病の名稱……………三七

(五)子宮とは何か……………三八

(六)子宮内膜炎の話……………三九

(七)子宮實質炎の話……………四二

(八)子宮外膜炎の話……………四五

(九)子宮筋腫の話……………四六

(一〇)子宮肉腫の話……………四八

(一一)子宮腺腫の話……………四九

(一二)子宮癌腫の話……………五〇

(一三)子宮轉屈の話……………五三

(一四)子宮脱垂の話……………五四

(一五)子宮萎縮の話……………五五

(一六)子宮閉塞の話……………五六

(一七)外陰部の病氣の話……………五七

(一八) 處女膜の病氣の話……………五九

(一九) 腔の病氣の話……………六〇

(二〇) 尿道の病氣の話……………六三

(二一) 膀胱加答兒の話……………六三

(二二) 卵巢の病氣の話……………六四

(二三) 喇叭管の病氣の話……………六五

(二四) 骨盤周圍の結締織炎の話……………六八

(二五) 婦人生殖器の結核……………六八

(二六) 婦人生殖器の痲疾の話……………六九

(二七) ヒステリーの話……………七一

妊娠を如何にして知るか

目次

次

(一) 月經閉止と妊娠……………七三

(二) 乳房の徵候……………七三

(三) 腹部の徵候……………七四

(四) 容貌に現はるゝ徵候……………七四

(五) 妊娠と便尿……………七五

(六) 妊娠と惡阻……………七六

(七) 物に好惡の徵候……………七七

(八) 妊娠と母體の病氣……………七八

妊婦と産婦の注意

(一) 寒い時に出産の多い理由……………七九

(二) 歸省してのち産は害あり……………七九

(三)流産、早産、難産の原因……………八二

(四)「むくみ」に對する必要な知識……………八二

(五)産後の肥立と一家の幸不幸……………八四

妊娠中の衛生注意

- (一)精神に對する注意……………八六
- (二)妊婦の居室と散歩……………八七
- (三)腹帯の締め方……………八八
- (四)過劇の運動を慎め……………八八
- (五)就寢起床を規則的にせよ……………八九
- (六)身體を清潔にせよ……………九〇
- (七)身體の下部を清潔にせよ……………九〇

(八)乳房の保護……………九一

(九)妊婦の食物と善惡……………九一

(一〇)便通に注意せよ……………九二

(一一)浮腫の注意と雙生兒……………九五

妊婦の罹り易き脚氣の豫防法

- (一)警戒すべき妊婦の水腫……………九七
 - (二)馴れた仕事は差支へなし……………九九
 - (三)長途の旅行は大禁物……………一〇一
- お産をする時の心得

- (一)通常分娩と異状分娩……………一〇五
- (二)分娩する時の順序……………一〇五

(三)分娩時の衛生的心得…………… 一〇六

(四)産室は如何にすべきか…………… 一〇九

(五)分娩具の準備の仕方…………… 一〇八

(六)産床に入りし時の心得…………… 一一〇

(七)産児に對する處置の仕方…………… 一一一

(八)後産に對する心得…………… 一一二

産褥中は如何にすべきか

(一)産褥の日數…………… 一一三

(二)子宮收縮と後陣痛…………… 一一四

(三)悪露と産褥熱の注意…………… 一一五

(四)發熱と便通の注意…………… 一一六

(五)授乳に就ての注意…………… 一一六

(六)産褥中は静臥せよ…………… 一一七

(七)身體の清潔を保て…………… 一一八

(八)産室と食物に就て…………… 一二〇

産児は如何に取扱ふべきか

(一)嬰兒の寢床に就ての注意…………… 一二二

(二)まくりは害あり…………… 一二三

(三)襁褓の取換へ方…………… 一二三

(四)牛乳を與へるに就ての注意…………… 一二三

(五)授乳上の注意…………… 一二四

(六)母乳の出し方…………… 一二五

嬰兒に乳を與へる注意

- (七) 嬰兒の口を清潔にせよ…………… 一三五
 - (一) 嬰兒の胃と腸に就て…………… 一三六
 - (二) 嬰兒と母乳…………… 一三七
 - (三) 母乳を與へて不可なる時…………… 一三九
 - (四) 母乳を與へる時間…………… 一四〇
 - (五) 母親が病氣に罹つた時…………… 一三三
 - (六) 授乳時の母の食物…………… 一三三
 - (七) 乳母の乳に就て…………… 一三三
- 乳母を雇ふ時の注意
- (一) 乳母の年齢…………… 一三六

嬰兒に與へる牛乳

- (二) 乳母の分娩時…………… 一三五
 - (三) 乳母の系統と遺傳…………… 一三六
 - (四) 乳母の乳汁…………… 一三七
- 嬰兒に與へる牛乳
- (一) 牛乳の効能…………… 一三八
 - (二) 牛乳に對する注意…………… 一三九
 - (三) 消毒、防腐、殺菌…………… 一四一
 - (四) 容器の洗滌の仕方…………… 一四四
 - (五) 乳兒に與へる牛乳の淡め方…………… 一四六
 - (六) 乳兒に與へる牛乳の分量…………… 一四八
 - (七) 母乳と牛乳の併用…………… 一四九

(八) ミルクの飲ませ方……………一五〇

(九) 其他の乳汁……………一五一

結婚生活には婦人の自覺が大切

(一) 離婚の多い原因……………一五二

(二) 離婚と自我の局小……………一五五

(三) 本當の自我を持たぬ女は哀れ……………一五六

(四) 進歩せる倫理學に依れ……………一五七

(五) 自覺せぬ婦人の結婚は駄目……………一五八

離婚と男子の道德心

(一) 一人前の女……………一六〇

(二) 腹藝のある女……………一六一

(三) 離婚は單純な女に多い……………一六五

子女平常の身嗜み

(一) 衛生上からも經濟上からも……………一六七

(二) 日本人と西洋人の髪の相違……………一六八

(三) 衣服と頭髮……………一六九

(四) 髪形の改良……………一七一

(五) 頭髮と黴菌……………一七三

花嫁花婿の健康調査

(一) 財産よりも健康の調査……………一七四

(二) 聰明な子と結核質……………一七五

(三) 性質と身體の似ない同士……………一七七

附

録

醫學上より見たる美容法

- (四) 生活の變遷より起る病氣……………一七九
 - (五) 花柳病と月經に對する注意……………一八一
 - (一) 美人になる大本……………一八三
 - (二) 濃い白粉と新陳代謝……………一八四
 - (三) 美貌と齒の攝生……………一八六
 - (四) 精神から身體へ……………一八八
- 四季の育児法
- (一) 正月の飲食其他の注意……………一九一
 - (二) 小兒病豫防……………一九三

- (三) 春は種痘の時期……………一九三
- (四) 食物の腐敗に注意せよ……………一九四
- (五) 食事と間食……………一九五
- (六) 濡れた衣服は着せるな……………一九六
- (七) 虫に螫されぬ注意……………一九七
- (八) 暑中と小兒病……………一九八
- (九) 夏期禁すべき飲食物……………一九九
- (一〇) 夏と小兒の外出……………二〇〇
- (一一) 睡眠時に腹を冷やすな……………二〇一
- (一二) 秋は飲食に加減せよ……………二〇二
- (一三) 秋と衣腹の注意……………二〇三

(一四) 秋と流行病……………二〇四

(一五) 秋と赤痢……………二〇四

(一六) 恐るべき疫痢……………二〇五

(一七) パナナは危険……………二〇七

(一八) 飲料水の注意……………二〇八

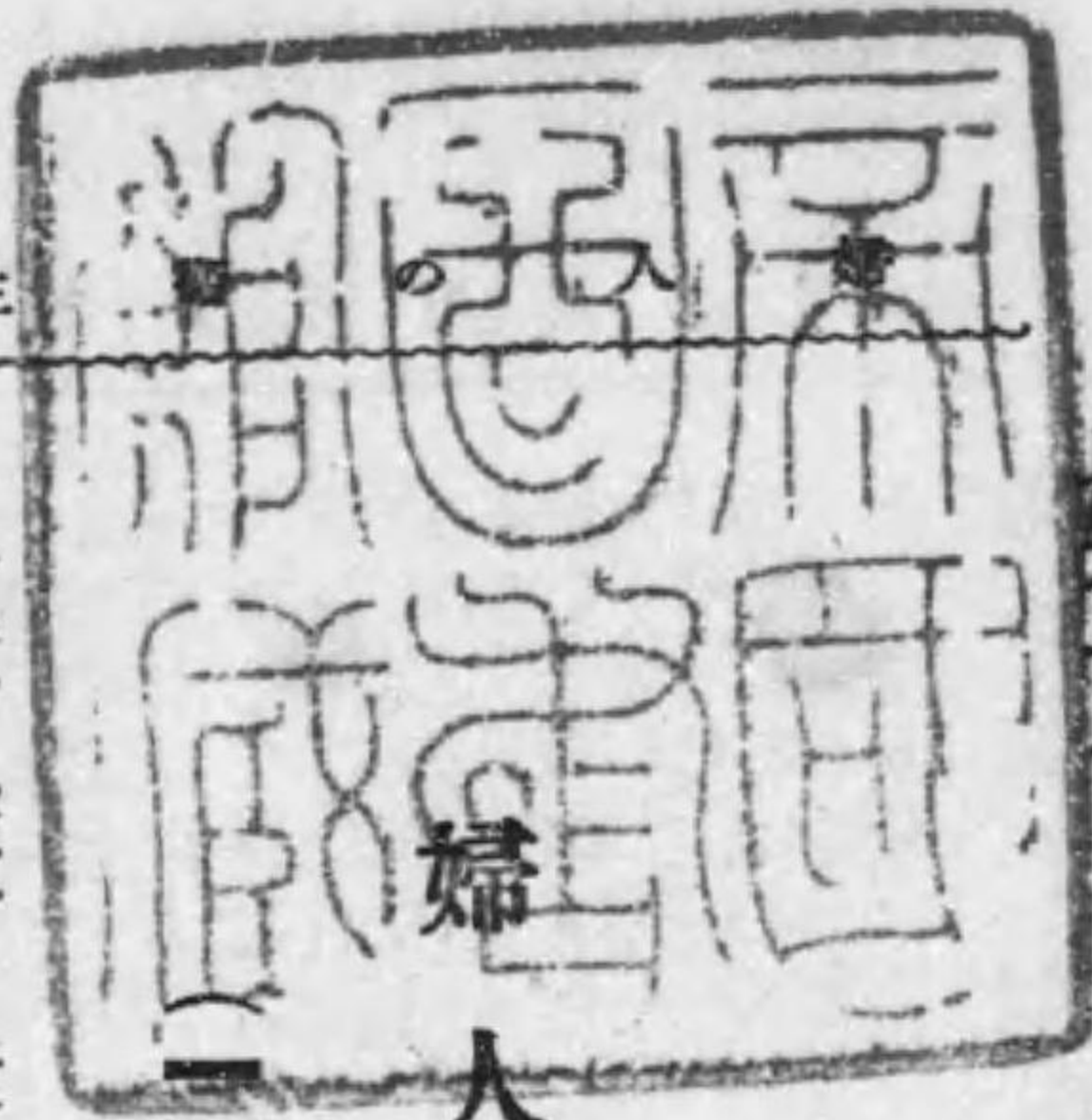
(一九) 冬の襦袢の取り替へ方……………二〇九

(二〇) 小児の入浴法……………二一一

(二一) 感冒に罹らぬ注意……………二一二

目次終

妊娠より育兒まで



婦人の衛生

(一) 生理的特徴たる月経

東京女子醫學專門學校長 東京至誠病院院長

吉岡彌生 著

婦人の男子と異なる生理的特徴の一は、月経のあると云ふこととあります。月経は子宮より出づる血性の排泄物であつて、「つきやく」「めぐり」「つきのなはり」「なはり」「経水、経癸、経行、天經、月華、其他種々なる異稱があります。

(二) 月経期と年齢

月経は、婦人の春期發動期より老人期に至るまで、二十八日毎に繰返して來る子宮よりの出血でありまして、その期間は、その心身の發育、營養、生活法及び人種に依りまして異なるのみならず、氣候、風土、開化の度、境遇、精神感動等に由つて、初期及び經閉の時を同じうしません。日本では十四歳より十六歳の期間に初るものが多く、平均四十七八歳位で閉止するものであります。普通大凡三十年間としてあります。中には十一二歳で初まるものもあれば、十七八歳以上にして初まる人もあります。その終りも、甚だしきは三十歳前後のものもあれば、六十歳に至る迄ある人もあります。而して初めの早い人は、終りも早く、初めの遅い人は、終りも遅いのが通例であります。すが、動もすれば初めが早くて終りが遅い、初めが遅くも終りが早いと云ふ異例もあ

ります。

(三) 身體の發育と月経

月経の初めて來る時期は、初めにも申しましたようにその人、その境遇で違ひますが、概して田舎の人よりは都會の人が早く、上流の人よりは下層の人が早く、強壯の人は、虚弱の人より早く、又嚴格の家庭の人は、淫靡の者より遅いのが通例であります。而して月経の初まる時期は、恰も生殖作用の發達した時期でありますから、月経が初めて來る頃には、俄に容子が變つて、聲が變り、腰幅廣くなり、乳房脹れ、脂肪が多くなり、腋窩や陰部に毛を生じ、其他一體に女らしくなるものであります。

(四) 月経の日數と分量

倍て月経は凡そ四週間目毎にあるもので、そのある間は平均四五日位のものでありますが、短いのは二三日間のもあれば、長いのは七八日に亘るものもあります。又同じ人でも、毎月必ずしも同じ丈の日数とは限りません。多少の相違があることは珍らしくありませんが、若し一、二日にて終り、或は八日以上持續するものは、何れも病的であります。又その分量も必らずしも、一定しませんが、著しい差がなければ、病的でないと思つて宜しいのであります。又少量の者は、月経のある日時も短いのが普通なのであります。その反対のものもないことはありません。

(五) 月経時の排泄物

月経の時の排泄物は少し黒味を帯びた血であります。純粹の血液のみではなくして多少粘液を混じて居ります。此の粘液は、月経の時ばかりではなく、其の前後にも量

を増すものであります。併し其の最も出血の多い時は、殆ど血液ばかりであります。而して月経の血液は、普通は凝固つたものではありませんが、非常に多量の時、又は短い時間に澤山出るときには、幾らか固まつた血液の出ることがあります。又一回の分量は、其の人、其の場合に依り違ひますが、凡そ五勺より一合五勺位のやうであります。

(六) 月経時の異状

月経のあるときには誰れにも多少の異状はあるものですが、通例、月経の時には、血行、消化などにも幾らか障碍を來し、尿意頻繁となり、何となく不愉快を感じます。その月経になる前には、下腹部に厭な感じがあつたり、重い感じがあつたり、緊満やうな感じがあつたり、眠氣が増したり、全身に疲勞を覺えたり致しますし、又少し前

に、薦骨部が、引かれるやうに痛んだり、股の邊や下腹部に輕痛があつたり、何となく全身に熱いやうな感じが致します。その他月經時には頭痛がしたり、身が倦怠かつたり、食物が不味かつたり、胃が痛かつたり、乳房が幾らか肥大して、動もすれば微痛を感じたり、甲状腺の膨脹することがあつたり、下痢をしたり、便秘に傾いたり、鼻腔の中が腫れたり、鼻血が出たり、悪氣がして嘔吐を催したり、唾液が頻りに出たり、關節が痛んだり、汗の出が多くなつたり、皮膚が濕潤して面皰の原因となつたり、精神快々鬱々し、外來の刺戟に感じ易くなり、怒り易く、悲み易く、七情の中庸を缺くなごのことがあります。而も人に依つて、殆ど平常の如くあつたり、以上のやうに多く故障を見る人もありますが、假ひ以上の何れが起つても、度の輕いのは、病的とは申されません。

七 月經時の攝生

以上月經の時の故障が甚しくあつたら、無論病的と見ねばなりませんし、今迄正しくあつた月經が、毎月なくして二三ヶ月か、數ヶ月に一回あるとか、月に二回もあることが度々あるとか、又月經の期間が著しく伸びたり、縮んだり、其の長短の差が甚しかつたり、俄に若しくは次第に、月經の量が、著しく増減したり、又殆んど月經のないやうなことがあつたりしたときには、大に警戒して、醫師の診察を受け、相當に之が治療又は攝生に努むることを忘れてはなりません。

月経時に心得べき衛生

(一) 月経時は清潔にせよ

さて月経は婦人には何方にもあるものでありますが、以下少しく此の婦人の最も大切なる月経中の衛生に就て述べませう。

第一には、身體殊に局部を清潔にすることでありませう。一體不健康は、不潔から起るものが多いのでありますが、月経中は、殊にだらしなくなり易いものでありますから、大に注意しなければなりません。それでなくとも最も不潔なるべき陰部は、常に清潔にすべきものでありますが、月経中は一層不潔になるものでありますから、大に清潔法を行はねばなりません。如何にして清潔にすべきかと云ふに、毎日數回微温湯

にて外部を洗ひ、その附着したる經血は、消毒したる綿、布片の如きものにて、之を拭ひ取るが宜しいのであります。であるからと云つて、膈の中迄洗つたり、種々の詰物などすることは、最も危険のこととて、是れがために、悪い細菌の侵入して、婦人病を起したり、その他詰物の爲めに、經血の流出を滯らする虞がありますから、此の如きことは、一切しない方が宜しいのであります。

(二) 月経時の處置法

能く通俗衛生書などを見ますと、消毒した綿などを詰めて置くがよいなどと、簡単に書いてありますが、それは醫師にして初めて安全に出来るのであります。早い話が素人が致しますと、假ひ消毒した綿などでありましても、之を取扱ふ手に、細菌の附着は免れません、鳥渡した醫書に依つてする消毒法は、最も危険の至りであります。

殊に消毒もしない紙や、布片や、綿などの詰物は甚だしく危険であります。然らば何うしたなら宜しいかと申しますに、消毒したものを、外部に當て、置くのが宜しいのであります。例へば月經帶の如きもので、消毒したるガーゼ、若しくは綿を小さく重ねて、局部に當て、その上に、普通の青梅綿半枚程を重ね置き、之を丁字帯にて固定し、汚染する毎に、下層から取り捨て、新しいガーゼ若しくは消毒綿を、少しづつ取り換へて置くやうにしたならば、最も清潔にまゐります。消毒綿又は消毒ガーゼは、醫師の許にて、シンメルプツシユ氏の消毒罐と云ふもので消毒しますが、素人の所にては、茶罐の二斤入位のを、蓋と身と重なる部分の周圍に、圓き穴十箇程を穿け、此の中に、脱脂綿又はガーゼを、幅二寸、長さ三寸位に切り、十分に入れ、其の穴の明いたまゝ蒸籠に入れ、二十五分間程蒸し、蒸し上りました後は、蓋の穴と身の穴と一致しませんやうに反對になし、外氣の侵入を防ぎ置き、一枚宛取り出して、局部に

當てるのであります。

(三) 月經時には入浴するな

此の如く月經中は、清潔にすべきものゝ、彼の入浴の如きは嚴禁せねばなりません。古來我が國の習慣としましては、月經中、入浴すると神佛に對して穢れるから、之を嚴禁するやうになつて居つたのであります。私共の申すのはそんな意味ではありません。入浴すると、血液循環亢進し、俄に多量の出血をなし、或は頓に出血の止む事があるのであります。又弱りて感應症に富める腔中に、異物が入る虞がありますから、自然炎症を起し易く、又は感冒に罹る心配があります。且つ人に對しては、不潔を厭はぬと云ふ無禮にも當るからであります。

(四) 月経時には精神を悩ますな

月経のあるのは病氣の作用ではありませんが、この間は、自ら身體も精神も一時的變化を起して、或は沈衰し、或は過敏となりますから、本人の平素より慎むべきは勿論であります。側の人にも殆んど病人に對するが如く、成るべく親切に靜肅にして居るのが宜しいのであります。月経中は前述のやうな種々の變化が起り、神經も過敏になり、鳥渡した刺戟にも感動し、何でもないことに泣いたり、怒つたり、憂ひたり、嫉んだりしますから、本人は平素より之を警戒して、特に慎重の態度を取つて、なるたけ神經を悩まさぬやうにし、良人其他の人も、成るたけ勞るやうにした方がよろしいのであります。されば小説を讀み芝居寄席に行き、及び讀書思索に耽ることを避けねばなりません。

(五) 月経時には運動するな

運動は婦人に取つても必要なことで、平素ならば、散歩體操などの運動をせねばなりませんし、又山に登り、遠きに旅行し、或は乗馬、薙刀、擊劍、柔術、大弓などの運動をするのは宜しいのであります。月経中はこれらの劇しい運動は禁せねばなりませんし、尙人力車、電車、汽車、自轉車、自動車、自動車の如きものに乗るのも、宜しくありません。彼の體操舞踏の如きものも、避けた方がよろしいのであります。要するに月経中は成るべくだけ休息して立ち働きなどは控へ目にし、長く腰を掛け、長く坐らないやうにするのがよいのであります。運動と云つても穩に散歩する位に止めるが宜しいのであります。

(六) 月経時には冷えるな

月経中は冷えてはいけません。なるたけ風に遭はないやうにいたすべきであります。殊に寒気に吹かれたり、風雨に遭つたりすれば、感冒に罹り易く、感冒に罹ると、所謂下風を引き、子宮及び子宮附属器の病気を惹起することがありますから、注意しなければなりません。又水に濡れることは禁すべきであります。彼の雨に濡れ、水の中に入つたりすることは、最もよろしくありませんから、彼の海水浴なり、水泳などは厳禁し、農家ならば、挿秧又は雨中の耕作などは厳禁せねばなりません。

(七) 月経時の睡眠と食物

食物は病氣中の如く、左程に吟味する必要はありませんが、成るたけ淡泊にして消

化し易きものを、選んだがよいのであります。又睡眠の如きも、何れかと云へば、平常より安く長くするやうにしたらよいでせう。彼の睡眠不足の如きは、平素でさへ最も爲めによくありませんから、月経時は、殊更よくないことを知らねばなりません。

(八) 最も厳禁すべき事項

月経中は、特に衛生に心を用ひねばならぬことは、種々申しましたのでお分りになつたことと思ひます。こゝに月経中の交接は何うかと云ふに、斯る不法のことをする方は、なからうと思ひますが、社會の廣き、果して其のやうなことをする人がないと申されないと思ひますから、一言申して置きます。尤も古より月経中に交接して妊娠すれば、癩病の子を生ずると云ふ教誡的の語もあります。これは今日の醫學上考證のないことであります。さりながら、月経中は婦人の身體に異状を來し、神経過敏

にして、病氣を起し易く、又子宮粘膜炎の充血甚しきを以て、危険なる微菌の侵入を易からしむるものであります。又夫がために子宮の炎症を起し易く、且つ之が不妊の原因となることがあります。此の意味に於て、交接を嚴禁すべきであります。

(九) 便通をよくせよ

月經中は、前述の外、特に便秘を避けることが大切であります。月經中に限らず、便秘は、婦人病と密接の關係がありますから、平素よく注意して、此の病癰に胃されぬやういたさねばなりません。常習便秘の癰ある人は、毎朝食前、コップに一杯宛の食塩水を飲用するのがよろしいのであります。

(一〇) 月經に就ての處女の知識

普通、月經中の心得は、以上の通りであります。初めて月經に襲はるゝ少女は、驚愕と恐怖との念に驅られて居るし、身體の異状や苦痛も尠くはないのであります。から、なるだけ、母たり、姉たり、教師たる人は、豫め月經のあることを告げ知らせ、何時來り襲ふとも狼狽しないので、適當の處置を施し、不養生をしないやうに教へて置くのがよいのであります。

(一一) 月經閉止期の異状

前述の如く、四十歳乃至五十歳に達しますと、月經がないやうになるのであります。が、此期を經閉期と稱し、多くの婦人が神經過敏になり、時々腹痛があり、又は腰痛があり、或は頭痛、胃痙攣等を起すもので、半ケ年位は此の状態にあるものであります。而して月經が突然なくなつて仕舞ふのでなく、時々缺けたり、二ケ月又は數ケ月

置きになり、終になくなつて仕舞ふのであります。月經がなくなると、今までの女らしき所はなくなるのであります。この間は、特に身體の衛生に注意せねばならぬのであります。

(一) 月經無き原因

月經のあるべき時代に、經血がないのを無月經と云ふので、これは持続性のと、一時性のとの二種があります。持続性とは、子宮及び卵巢の發育して居ない爲めや、子宮に缺くる所があつたり、發育の悪い爲めに來るもので、他の原因から來るものは、殆ど稀れてあります。又一時性の中には、生理的のと、病的のとの二つありまして、生理的の方は、妊娠したり、哺乳させたりする時に來るものであります。稀には哺乳最中にも、月經のあるものもありますが、これは、ない方が宜しいのであります。病

的とは、子宮及び卵巢病、別けて慢性子宮實質炎の徴として顯はるゝことがありますし、その他全體より來るもので、營養の悪いもの、又は多量の出血後、貧血、結核、慢性胃加答兒、慢性腎臟炎、糖尿病、白血病、悪性疾患の悪液質、萎黄病、進行性麻痺狂、ハセドウ病、急性傳染病の疾患殊に窒扶斯の經過後、脂肪過度症、肥大性鼻粘膜炎より來るものもあります。又劇しい恐怖、悲哀、憤慨、その他精神感動より突然來ることがあります。一體無月經は、本來のものを除いては、不意に起ることは稀であつて、普通經血が次第に少くなり、そのない間が延びると共に、出血の時が減じて來り、遂に一回乃至數回も閉止しますが、原因たる病氣を治すると共に、舊來の如く來潮するものであります。即ち五週乃至七週間を経て、キチンと繰り返すやうになるので、その月經の來るべきときには、腰痛、頭痛、胸内苦悶及び鼻、胃、直腸、潰瘍の創口等から出血することがあるし、又吐血、咯血、痔血を以て代償することがあ

ります。

(一三) 無月經の處置

以上無月經に係る攝生を申しませう。さて此の無月經が先天性で子宮の發育不完全に基くものも稀れには治療に因つて月經の來ることもあります。全身病から來るものは、その原因を治するやうにすることが、肝要であります。營養不良、貧血等より來るものは、食物に注意し、牛乳、鶏卵、鳥獸肉、豆腐その他の滋養分を食し、日光に觸れ、新鮮の空氣を吸ひ、冷水摩擦、深呼吸法、體操、遊戲、散步、遠足をするのもよい。又温泉浴なども宜しく、座浴などは殊に宜しい。要するに健康法を行ひ、精神を愉快にするのであります。かの鐵劑その他醫師の指定したる藥を飲むのはよいが、賣藥には随分有害なものがありますから、一應醫師に相談する方が安全であります。

(一四) 月經過多の心得

月經の過多とは、月經の量が通例の人よりは多くあつて、久しきに亘り、健康を害することでありませう。月經の量は、その人その時期に依りまして、相違するのであります。併し俄に多くあつたり、強かつたり、弱かつたり、止んだかと思へば、俄に劇しくなつたりいたしましたして、全身に影響を來し、甚だしい貧血その他の障礙を來すものであります。これは慢性便秘、劇しい精神感動、營養不良、血友病、肺結核、紫斑病、ウエールホーフヒ氏紫斑病或は心、肝、胃の疾患に伴へる虚性充血などに原因して居るものもあります。稀れには著しい婦人病なくして起る事もあります。子宮の轉位、子宮の新生物、慢性炎症、殊に子宮附屬器の病氣より起ることが多いのであります。その他類に反覆する分娩流産、過度の交接、手淫、或は入浴過多等も原因

となることが多いのであります。醫學上では、月經過多の原因を年齢にて分類するときは、少女に起る月經の過多は、専ら神經系統の障礙に基いたものでありまして、全身療法に依つて治療する事が出来るし、中年の婦人は、多く分娩及び産褥熱に原因し、局所療法を要し、四十歳以上の婦人は、子宮の腫瘍、殊にその悪性のものに依ると云ふのであります。月經の過多には、普通には、餘り疼痛を感じませんけれども、往々にして一官能の知覺過敏、例へば皮膚の過敏、頭痛を感じて眼はゆく、種々の音響が氣になり、物の臭氣が變であることがあります。之が續くと、癩麻質斯性の疼痛を發し、甚しく貧血となり、老婦人には往々にして惡液質に陥ることがあります。

(一五) 月經過多を如何にすべきか

月經の過多を治するには、その原因たる病氣を治することが肝要であります。既に

貧血となりました婦人は、彼の鐵劑などを飲むのは宜しいのであります。療法には冷水を腔内に注入する法がありますが、素人療法はしない方がよいのであります。感動の種となるべき事柄を避け、氣を安め、心を平にし、身體は平臥して、下腹部に氷嚢を當て、腰部に温囊をつけるも宜しいのであります。薬は素人療法は、有害無益でありますから、醫師に診斷を乞ふた上で處置するが宜しいのであります。

(一六) 月經困難とは何か

月經の困難と云ふことは、月經中は前に述べましたやうに種々の異狀があるのではありませんが、克く堪へ得る疼痛その他の異狀でなく、其等の異狀が劇しくあつて、頻りと不快を感じ、全身症狀を伴ひ、非常に困難するのを云ひます。この原因は種々ありますけれども、子宮の頸管又は腔管が狭かつたり、不完全である爲めに、十分經血

を出し兼ねるものもありますし、子宮内膜炎、子宮の轉位その他生殖器に障礙ある爲め
 のもありませんし、神経性に來るものもあります。その神経性に來るものは、月經の初ま
 らぬ數日前より、精神が鬱々として頭痛を感じ、腰部下腹部が痛み、尿意頻に催し、
 その他種々の疼痛もありますけれども、經血の出づると共に、種々の疼痛も緩にな
 りますが、子宮病のある者は經血の出づると共に、局部、腰部、内股などに劇しい疼
 痛を發し、甚しきに至つては、嘔吐し、往々にして氣絶することさへあります。

(一七) 月經困難時の心得

月經の困難に處する法としては月經の初めより精神を安靜にして、平に臥して成る
 たけ動かぬやうにし、食物を控へ目にし、なるたけ滋養物を取り、下腹部や手足を温
 包し、便秘あらば緩下劑を飲むがよいのでありますし、下腹部には芥子を塗り、外陰

部には、温濕布を當てるが宜しいのであります。而してその生殖器の異狀等に基くも
 のは、それを治することは必要であります。月經の困難に就ては、種々の説もありま
 すが、この位のこととは打ち棄て、置きますと、取り返しつかないやうになります
 から、月經の困難の方は、一應醫師の診斷を仰ぐが一番よろしいのであります。

(一八) 月經時と眼病

月經の時分には、婦人の身體には抵抗力が弱いので、眼疾のある婦人は、月經の最
 中になりますと、眼の病氣が悪くなり、月經が終つて、ない時のやうに復します。而
 して健康の婦人でありましても、月經中は、眼瞼が多少充血しましたり、眼の周圍に
 青い輪が出来ましたり、又は眼としまして、眼脹を起しましたり、結膜炎とか、紅彩
 炎とか云ふやうな病氣や、眼底の病氣を起したりいたします。一體眼の悪い人は、月

經時には、眼を悪くし易いのでありますし、殊に月經の不順なのは、常に眼病を起し易いのであります。殊に水泡性結膜炎、虹彩炎などには胃され易いのであります。眼の視力を掌る神経は、月經の不順に、密接なる關係を有し、視神経炎を起し、時として盲目同様となることがあります。されば眼の爲めから云つても、月經中の衛生は、非常に大切であります。

(一九) 月經と婦人病の原因

以上述べましたやうに、月經は婦人にとつて、中々注意を要するもので、この月經のある時に、油断をすると、不健康を來し、終に種々の病氣に罹るものであります。殊に婦人の最も難澁する婦人病は、月經時の攝生に依り餘程減少することは受合であります、ですから月經のない年齢の人、即ち幼年又は老年の婦人には婦人病と云ふも

のが至つて少く、稀に先天的のものとか、又は月經のあつた時に起つた慢性病や、少數の悪性の疾患に止る位であります。

(二〇) 月經に對する深き注意

此の如く月經と婦人病とは、密接の關係があるので、醫師が婦人病を診斷するに當つても、月經の様を、最もよく知らねばなりません。然るに、多くの方は明瞭に答へることが出来ませんばかりでなく、月經とはどう云ふものであるか、毎月正しいか、正しくないか、其の量が多いか、少いか、どんな疼痛があるか、どんなところにその疼痛があるかを明瞭に言ひ得ない方がありまして、明確なる診斷を下すことの出来なことがあります。月經に對する心得と之が處置法は婦人として常に知つて置かねばならぬことであります。

結婚時に心得べき重大注意

(一) 生殖器は婦人の生命

婦人の生殖器は、その生命幸福を左右するものと云つてよい位であります。されば常に之が攝生に注意し、大切に取扱はねばならぬのであります。而して清潔は、黴菌驅除、病魔退散の第一散でありますから、陰部の清潔に注意せねばなりません。それだけでなく、最も不潔なる局處でありますから、最も心を用ひて清潔にすることに努めねばならぬのであります。彼の交接などのことを云つたりしますことは、最も申し難い所でありますが、その時期、その度数、その方法に就ては、大に之が適度を計らねばならぬのであります。過度の交接及び不自然なる淫事は、多く生殖器を損ひ、身

心を毀し多くの疾患の基となるのであります。のみならず、是れを極めて多く、不妊の原因となるのであります。尙生殖器に關することは、兎に角、診察を受くることを臆劫となし、時機を失ふ例が往々あります。此の如きことのないやう、初期に治療を受くるやうにせねばならぬのであります。最も初期にさへ治療せば、面倒もなく安全であります。彼の素人療治に依つて、全快を圖ることは、失敗の本であることを忘れてはいけません。

(二) 結婚には此の注意が肝要

結婚は人生の一大事で、殊に婦人に取つては、男子以上に不幸の岐るゝ所でありますから、之が初めに注意すべきは申す迄もなく、已に世人の知る所でありますが、結婚成立の前に、下の如きことを知つて置かねばならぬのであります。

借て生殖器に關する良人の病氣は、之に伴れ添ふ婦人に、殆ど必然的に傳染するものであることは、別に縷々述べませんでもお分りのことであらうと思ひます。事實婦人病の七分通りは之を男子より受くるものと云はねばなりません。結婚後間もなき婦人が、月經の過多、白帶下の多量、下腹部の疼痛等にて、醫治を乞ふものが澤山ありますが、診断するに、是れ多くは、良人の痲病の毒を受けられたものであります。されば、婦人として、男子の如何はしき病氣に罹れるや否やを察し、そのなきものに限つて、結婚すべきは當然の權利であり、又直ちに社會國家の爲めであると信じます。かの獨逸あたりでは男子にして、微毒を患ふる時は、全治後尙滿一ケ年間は結婚を遠慮することになつて居ります。これは治りさへすれば、直ぐ結婚してもよかりさうなものであります。さうしないと云ふのは、一ケ年間位は、眞の全快か否かと疑はし

いからであります。

(三) 必ず妊娠する方法

借て良人ある婦人の妊娠は造化より得たる當然の權利でもあり又義務でもあります。が、その妊娠を確的にせんには、夫婦雙方共、健康無病にして、婦人月經後一週間に内に、妊娠するものであります。月經後妊娠すると云ふ理由は、婦人の卵が子宮内に

出て居ると云ふこと、又男子の生殖慾の興奮して居る爲めとの二つであります。此の如く男子の一意専心は、受胎に必要な一原因としたならば、強壯なる子を設けんとするならば、固く一夫一婦の制を守るやうにせねばなりません。

(四) 何故子が無きか

子の無い理由は、恰度前述のこと、反對するのであります。即ち男子ならば翠丸炎

を患つて、睪丸を双方とも不完全にしたる人などの如き、女子ならば、生殖器の不全、又はひどく病氣を病める人などでありますが、尚ほ其他の原因として數ふべきは、男子の分泌物と、女子の分泌物との配合が悪く、爲めに折角子になるべきものが却つて相殺して、生殖器力を消すと云ふことがあるのであります。斯ることは、人として造化の妙を臆測し兼ねる所である。彼の過度の交接、その他生殖器の不攝生は申す迄もなく到底子供を得る途でないのみならず、天壽を全うする所以ではありません。

(五) 妊婦と産婆

産婆は、大切な出産の事を扱ひ、看護婦は、病人の世話をするもので、何れも責任は重いが、中にも看護婦は、醫師の指揮を受けて之をなすものでありますし、産婆は獨立のものであるだけ、それだけ責任の多いものであります。産婆の取扱ひ如何に

よつて、母若しくは子の生命にも關する程のことにもなりますから、各家庭に於ては、種々な情實に拘泥しないで、成るだけ誠實懇篤、技術の確かなる産婆を頼むやうにせねばなりません。單に近いから、或は人がよいからと云ふやうなことで、選擇してはいけません。

尚ほ産婆と産科醫との職業上の差別は、産婆は生理的即ち異状のない産のことを取扱ふものであるし、少しでも病的であつたなら、産科醫の仕事となるのでありますから、この範圍を知つて、産婆があるからと云つて、病的の事を産婆に頼んではいけません。一應醫師の診断を仰いだ上にせねばならぬのであります。

婦人の病氣の心得

(一) 婦人にのみある病氣

婦人の病氣と申しますと、世間の方が御存じの通り、婦人にのみありますところの病氣で、主として婦人の生殖器、即ち子宮及び子宮に附属しました臓器の病氣であります。申す迄もなく子宮は、婦人に取りまして最も大切な機關でありまして、これさへ健全且つ強壯でありますれば、身心も健全且つ強壯であると云ふことが出来る位であります。私が常に、婦人は下腹部の保護と云ふことが非常に大切であると云ふのは、斯う云ふ意味からであります。



(二) 婦人病の増加

然るに一般の方は、近頃は婦人病が多くなつて來た、婦人にして子宮の悪くない方は殆んどないと云ふやうなことを云つてお居てなされるのを度々耳に致すのでございませぬ。斯く子宮病の殖えたと云ふことの原因を考へて見ますに、それは社會の日に月に複雑となり、優勝劣敗の結果、生活難その他の不如意のことが多くなり、婦人の大切な機關をも弱らしむと云ふことは萬已むを得ないことであります。併し單にそれだけでは、一方に衛生の道も開け醫藥の術も進んでまゐりましたから、さう患者の殖えるものではございませぬ。それならば何う云ふ譯であるかと申しますに、昔時ならば、やれ腰が痛いとか、下腹が痛いとか、頭痛がするとか、眩暈がするとか、月經が不順であるとか、白帶下があるとか、さう云ふことを別に大したことはない位に思つて

居りまして、症状が重くなりますと、血の道であるとか何とか云ふ表面的又は部分的の名を付けましたものでありますが、今日では、何れの症状でも其の原因に遡りまして、これは子宮病である、婦人病であると云ふやうに診断をいたしますから、自然この病の数が多くなつたやうに感ずるのであります。併し決して数が多くなつたのではありません。

(二) 婦人身體の強弱

所が少し身體に異状がありますと、すぐ心配をしまして、婦人病ではあるまいか、婦人病ならば、子宮癌ではあるまいかなどと、非常に心配して、癒るべき病氣も精神的に進ませて危くする人があります。さうかと思ふと何アにこればかりのことは婦人の常である、婦人の持ち前である、衛生だの醫療だのそんなことに關ふことはないな

ごと、高を括つて居る方もあります。前者の心配する方の側は、多少衛生を知つた人の、身體又は精神の弱い人であつて、後者は餘り衛生を知らない、身體又は精神の強い人、否な盲蛇に怖ぢずで、何れかと云へば、昔風の人に多くあるのでありますが、何れも、中庸を得た人とは申されません。徒らに心配して針程のことを遠程に思ふのも、神經作用で病を重くするのでありますし、それかと云つて、軽い病氣を打ち棄てて置いて、終に重患にすることも、其の實例に乏しくはありません。要は徒らに心配をしないで、又徒らに打ち棄て、置かずに、平素十分衛生の道を盡して、愈々病氣とならば、その將に萌さんとするに當つて、十分に醫療を施し、禍根を未だ甚しくないうちに、斷つことを理想とせねばなりません。

(四) 婦人病の名稱

さて婦人病即ち子宮病と云ふ中には、種々あります。之を廣義に申しますと、男子にない病氣は何れも、之に屬して居ると申しても宜しい。先づ之を擧げて見ますならば、子宮の畸形、子宮の轉位、子宮粘膜炎、子宮實質の炎症、子宮の新生物を始め、喇叭管の疾患、卵巢の疾患、骨盤の疾患、生殖器の痲疾、膀胱及び尿道の疾患、膾の疾患、外陰部の疾患等に係る種々の病氣であります。純粹なる子宮病としては子宮内膜炎、同じく實質炎、外膜炎、腫瘍を最も重なるものとし、子宮の附屬器の病氣としては、卵巢の病氣、輸卵管即ち喇叭管の病氣、その他、骨盤結締組織の病氣などであります。通常之を總稱して婦人科病と云ふのでありますが、その中で最も多いのは、子宮内膜炎で、次は附屬器の病氣であります。

(五) 子宮とは何か

子宮は讀んで字の如く、子供即ち胎兒の住むべき宮殿のやうなもので、袋状のものであります。その内面の粘膜炎となつて居るものを内膜と稱し、外面の皮膜となつて居るものを外膜と稱し、内面と外面との皮膜の中にある肉質を、子宮の實質と云ふのであります。

(六) 子宮内膜炎の話

子宮内膜炎とは、子宮内膜の病氣であります。それには急性、慢性の二種があります。その急性とは、初め下腹が痛み、續いて熱を發し、白帯下がりて來るのであります。これは何らして起るかと思ふに、普通、男子の痲毒を受けたときに多い。然らば男子の痲毒を、何時受けるかと申しますに、月經を了へましたときに交接した場合には、多く傳染するのでありますから、月經が了へて、二三日後に、前述の異状を呈

しました時には、大抵は急性の内膜炎であると思つてよろしいのであります。又この病氣は、月經の取扱ひの悪いことから來ることもあり、この病氣は安靜にして、氷などで下腹部を冷すのであります。早く氣が附いて、早く手當てを加へますれば、半ヶ月か一ヶ月位で全快するのであります。打ち棄て、居ります時には、慢性となつたり、非常なる危険の状態に立ち到るのであります。それから慢性の子宮内膜炎と申すのは、急性から直ちに慢性になるのもあれば、初め是れと云つて痛みがなくて、白帶下などあり、遂には頭痛、眩暈、腰痛等があり、又消化不良を起し、容易に治らぬやうになります。又之が一步進みますと、附屬器の病氣となり、子宮の外膜までに達するやうになり、非常なる激痛を來し、耐へ切れないで、醫師の注射を受けねばならぬことになるのであります。而してそれが慢性の卵巢炎などになりますと、終生不妊になり、自分一人のみならず、一家の不幸を來すことになるのであります。初めは

ほんの少しのことから始るのでありますから、平素の用心が肝要であります。男子の方には、三年子なきは去ると云ふ諺もあるのであります。事實上その三年どころか十年も十五年も子のない方がありますが、その原因は男子より傳染されることの多いことを知らねばなりません。又世の舅姑さん方に一言申して置きたいのは、「宅の嫁は、丈夫だと云はれましたが、近頃は大分弱くなりました。飛んでもない病氣に罹つて、薬を服んだり、醫師に行つたり、うるさいことを云つて居ります。』との線言は、よく聞くことでありますが、この線言を言はした其の原を尋ねて見ますと、自分の息子に責があるのであります。且つ嫁の病氣になりましたのを、若い者は大形に云つて居る、そんなことで醫者に見て貰ふ程のこともあるまいと云つて、醫療をも加へさせないと云ふのは、同情のない苛酷な仕業と云はねばなりません。而してその急性のものには前に述べましたやうに悪寒がして腰が痛んだり、白帶下が下りたりいたします。

一度あがつた月經が、間もなくあつたりするやうなときは、多くはこの病氣でありますから、その場合には大急ぎで醫師の診斷を受けねばなりません。而して慢性のは、自然に腰が痛かつたり、神經が非常に過敏となつて、動もすれば激しく怒り、激しく憎み、激しく愛すると云ふ具合になることを知らねばなりません。

(七) 子宮實質炎の話

子宮實質炎は、子宮の内膜と外膜との間にある實質の炎症で、近隣の組織の病氣と混同することが多いのであります。その急性のものは、産褥又は月經期の感冒、交接過度、外傷、粗暴なる婦人科醫の檢診より發し、又は子宮内膜炎から直に來るもので、子宮は著しく腫れ脹れて肥厚し、内外の粘膜も、之が影響を被ると云ふ事になります。而してその初期には、惡寒發熱し、下腹部及び薦骨部に引きつるやうに劇しい痛

みを起し、次第に進んで來ますと、咳嗽、談話、嘔などに依つても、劇痛を増し、膀胱や腸に堪ふることの出來ない障礙を伴ひます。又それが月經時の感冒に依つて發生しましたときには、月經は俄に止り、數日を経て再び強く出ることがあります。この病に罹るときは、非常に神經が過敏となり、下腹部には軽く指を觸れることも出來なくなります。合併病がなくて初期に治療を施しますときは、數日にして治することもありますが、併し再發し易く、又他の病氣を起し易いのですから、餘程注意しなければなりません。療法としましては、靜かに臥つて、氷罌法、下腹部の瀉血、座浴、灌注等の方法がありますが、何れも醫師の指揮に依らねばなりません。それから慢性の方は産褥より來るものが多いのでありますが、子宮内膜炎、その他子宮諸病より來るものが尠くはありません。甚だしき興奮を伴へる過度の交接、射精前に中止せる交接、生殖不能の男子との交接、手淫等より起り、子宮は常に増大し、子宮口などは、糜れ

て來ます。一體慢性のは、徐に發生するもので、大抵内膜炎、外膜炎と共に併發するものでありまして、本症に限る特別な徴候はないのでありますが、只産褥に續いて起るものは、多くは變つた徴があります。それは産婦は産褥より快復せず、分娩後二三ヶ月を経ても、次第に瘦せ衰へるのみで、一寸働いても薦骨部及び陰部に疼痛を發し、悪露は益々多くなり、陰門の押し開くやうな氣持ちがして、尿意を催し、便秘を來し、子宮出血が度々あり、又白帶下、嘔氣、胸痛、胃痛などのあることがあります。所が、粘膜炎の病氣や、月經の障礙に基いたものは、容易に分らず、何時となく貧血性となり、世に娛樂などを覺えず、次第に下腹部の疼痛、重苦しさ感、薦骨部の疼痛、月經前後の引きつるやうな感じ、食物は美味を感せず、白帶下の下りると云ふ有様で、子宮は、急性の如く過敏ではなく、區々であります。療法としましては、之が原因を避けるやうにして、産褥の後ならばその攝生に力を用ひ、非産褥性のもものは、温泉に

浴するなど、身體の發育を盛んにし、月經時の衛生に注意し、既にこの病氣と覺つたならば、一時も早く、醫師の診察を受けねばなりません。慢性のもものは、然るべき病院に入つて手術を受けるより外はありません。

(八) 子宮外膜炎の話

子宮外膜炎は、子宮を包む膜の炎症であつて、痲毒性内膜炎から來るものもあれば、感冒から來るものもあります。又分娩、産褥から來るものもあります。又過度の交接、手淫等より來るものもあります。この病は遂に膈膜炎、症を傳播し、腹膜炎となることがあります。病状は、その急性のものは、悪寒發熱し、脈は弱くて繁く、嘔吐、便秘、腹部の膨れ、呼吸が苦しくなり、危険状態に陥るのでありますが、その慢性のものは、久しく覺らぬことがあります。月經の時や、内膜炎などのときと、同じやうに苦

惱があることが多いのであります。それが進んで、薦骨部や腹部の疼痛は續いて、月經のあるときや、便通の困難のとき、又は交接のときに發し、尙ほ膀胱の不快な刺戟を伴ひ、全身が何となく不快を覺えます。この病氣は數多の婦人病中、最も厭ふべき病氣でありまして、腹膜全體に及ぶことがあるばかりでなく、急性症狀の際、適當なる治療を施さない時は、癒着若くは化膿に依つて、骨盤内の臓器を害し、夫が爲め子宮の位置を損ひ不妊の原因となるは勿論、終始「ヘステー」症狀を伴ふものであります。療法は内膜炎に似たもので、靜臥して便通に注意し、疼痛が甚しければ、腹部に氷嚢を當てたり、膈を灌注したり、種々の方法がありますが、成るべく病院に入つて、婦人科醫の手術を受くべきであります。

(九) 子宮筋腫の話

子宮筋腫は、子宮實質の中で生ずる圓形の腫瘍でありまして、子供を生まない老婦人に多き病氣であります。この病氣は、子宮が肥大したり、固くなるものであります。が、初め下腹部が壓しつけられるやうに痛み出し、尿を催して便所に行つても思ふやうに出ず、又白帶下に血が混じり、月經のときに劇しき痛みを覺えて多量に出血し、その他月經でないときにも、多く出血することがあります。この病氣は、局所には左程の苦痛を感ぜざるも、子宮は益々肥大し、月經期間は、十日より二十日位に渡りて、多量の出血を爲し、月經止みて後も白帶下多く、此の如き症狀が毎月反覆いたしますから、遂に全身の貧血を起し、即ち貧血性諸症狀を來し、遂に天壽を保たぬ人があるのであります。故に筋腫の診斷を受くるときは、開腹術なる手術を速に斷行するのが永遠の策であります。

(110) 子宮肉腫の話

子宮肉腫は、子宮腫瘍中、子宮癌に次いで悪性のものでありますが、至つて稀な病氣であります。其子宮癌と異なる所は、幼女、處女も罹り、未産婦に多い病氣であります。この腫瘍は、子宮粘膜に發し、子宮腔内に出て、又は子宮の實質に生ずるものでありまして、之を粘膜肉腫と實質肉腫との二つに區別してあります。粘膜肉腫は、初め子宮より淡い水のやうなものを洩らし、追々に多量になり、悪臭を放つやうになります。疼痛は極めて少いのと劇しいのと二種ありますが、身體は大に衰弱するものであります。而して實質肉腫は、悪性の腫瘍に持前の出血、白帶下、疼痛等を發します。即ち月經が多量でありまして、この他時々子宮より出血し、白帶下は赤味を帯び、若しくは膿のやうであります。粘膜の潰れたものゝ外は、悪臭を放たぬのを常とい

たします。疼痛は、薦骨部と腰部とに起るのでありますが、時に、前述の如く、痛まないこともあります。治療法は、子宮全摘手術の外はありません。なか／＼難かしい病氣でありますから、最も初期の時に治療するやうにしなければなりません。

(111) 子宮腺腫の話

子宮腺腫と云ふのは、子宮の腺状の新生物で、散發するものと、茸のやうに出るものとの二つありまして、前者は癌種に變じ易いものでありますが、後者は比較的良性的のものであります。この病氣は、月經の竭む前や、竭んでから後ちに起り易く、慢性子宮加答兒殊に痲毒の傳染後に罹り易く、又は産後並に腺病質の婦人に生じ易いのであります。病状は、時ならぬ出血を徴候とするのでありますが、餘り多量ではありません。月經は大抵整然と行かず、而も多量でありますから、貧血を生じ易くなります。

白帯下は少量で、殆んどないものもありますが、悪性のものは、多量で悪臭を帯び、下腹部が壓迫されるやうに重苦しく、腰痛もあります。この病に罹ると次第に瘦せて、衰弱するのであります。治療も早期でないと難かしいので、矢張り手術を要しますから、一日も早く醫師の治療を受けねばなりません。殊に早ければ早いだけよろしいのであります。

(一三) 子宮癌腫の話

子宮の腫瘍の中で、最も悪性のもものは、癌腫であります。癌腫は若い婦人にもないことはありませんが、四十歳以上の婦人に多い病氣であります。之が徴候は、月經の時の外に、ちよいと出血しましたり、若しくは時に大出血し、腹が痛かつたり、食欲がなかつたり、何となく衰弱したりするのであります。癌腫の最も初期に當り、顯

徴鏡で見ても、僅かに分る位なときに治療を施しますと、全快することが出来ますが、肉眼で見ても、顯然と見えるやうになつては手術もその功を奏しないのであります。尤も二年なり三年なり、壽命を延すだけのことでは、手術しても何うしても、癒え切ることはないのであります。癌腫は月經以外に出血し、而も血に臭を持つて居ります。この病氣は月經の將に上らんとするときに多いのであります。それでありませうから、平素から攝生に努め、若し不幸にして一朝癌腫の初期ではないかとの疑ひがありましたら、早く婦人科醫師の診断を仰いで適當の治療を施さねばなりません。それをこの年まで、醫者に見て貰つたことのない者が、年を老つてから、子宮などを見て貰ふのは、いやだなど云つて、終に病症を進ませて、再び取り返しつかぬやうなことを出来るのは、愚の甚だしきものであります。

附記して置きますが、古から白血と申しますのは、慢性内膜炎でありまして、長

血と云ふのは、癌腫を指したものであらうと思ひます。昔しから白血と長血とは殆んど癒らないものとしてあつたのであります。

(一三) 子宮轉屈の話

子宮は普通、稍々前に傾き、體と頸とは前方に開けて鈍角をして居るものであります。病的に位置を轉屈するのを、前轉、前屈、後轉、後屈の四種といたします。前轉は割合に少ないのであります。他の子宮病を起し易く、前屈は先天的なるあり、産後、麻疹、腹膜炎、劇しい腹壓等より生ずるもので、中には殆ど障礙を來さないものもあります。或は之を病む處女にして、年老つて月經が竭むときのやうに、尿に頻りに行きたくなり、膀胱に故障を起すことがあり、殊に月經後に於て、著しく之を感じ、下腹の中央に疝氣のやうな疼痛を感じ、若しくは月經に先立ち、若しくは伴ひ、數年

間續いて、慢性膀胱加答兒、腸胃の障礙、頭痛などを來すことがあります。身體發育し、結婚後妊娠するに至つて消滅するものもあります。處女の單純なものは、左程の治療法もありませんが、食物運動等の攝生法を怠らぬやうにしなければなりません。又後轉、後屈は、産後長く仰向きに臥したり、便秘したり、膀胱が腫れたり、劇しい腹壓を受けたり、他の子宮病より起るものであります。中には身體に異状あるを覺らず、單に妊娠しないばかりのもありますが、矢張尿に頻に行きたがり、下腹部に壓へらるゝやうな感じを起したり、腰が痛み、便通、歩行、交接の際に多少の疼痛を感じ、月經の困難のこともあります。以上の病症ある者は、妊娠しないと斷言しても宜ろしい位でありますから、子のない者は、早く醫師の診斷を受けるが宜ろしいのであります。豫防法としましては、平素より過激の勞働、その他不攝生や不衛生のことをしないやうにし、産後に深く注意し、既にこれ等の病氣たるものが分れば、手術に

依つて、普通の子宮にして貰ふやうにしなければなりません。

(一四) 子宮脱垂の話

子宮の脱垂とは、子宮の垂れて出る病気で、下垂及び脱垂の二つがありますが、原因は難産の爲めとか、産後の労働や、老人の萎縮性や、劇しく腹部を壓したり、或は手淫の爲めなどから起る病気であります。その急に垂れ出るものは、非常に疼痛を感じ、氣絶するものがある位であります。次第に出るのは、下腹部及び腰部に何となく痛みを覚え、尿も便も出にくくなり、歩行すると何となく、子宮の垂れ下るやうな心持ちになります。それが初期なれば、靜かに仰臥して居れば自然に復することがあります。次第に出たきりになり、生殖機能を營むことも出来ず、嘔氣を催し、身體衰弱し、ヒステリー性の人となることがあります。この病氣も初期でありさへすれば

ば全治の方法があり、手術を厭へば子宮架と云ふ器械を挿む方法もありますから、戚るべく早く治療に努めねばなりません。

(一五) 子宮萎縮の話

子宮萎縮と云ふのは、他の部分は何く發育しても、子宮ばかり萎縮して居る病氣で凡そ二種あります。一つは先天性に子宮全體の發育不十分のもので、他の一つは、後天性の子宮の萎縮であります。子宮の萎縮は、處女期に至るまでは特別なる障礙がなくして、結婚後、月經が缺乏したり、妊娠しなかつたりするので、氣づくのであります。外観は非常に脂肪が多く、何時迄も處女のやうな風があり、月經が起らんとしても出血せず、その際或は下腹部の兩側に疝痛あり、生殖器の分泌増加し、膀胱や直腸に壓迫を感じ、神經過敏となり、春情が興奮し頭痛腰痛等があります。療法

としては貧血より来るものは滋養物を食し、鐵劑を服し、脂肪過多のものは、下劑、運動、海水浴を施し、局所療法をも施さねばならぬのであります。その他産褥より来るものは、授乳を廢し、全身の營養に勉めねばならぬのであります。

(一六) 子宮閉塞の話

子宮閉塞と云ふのは、先天性のは少く、大抵は後天性であります。處女期に至つて初めて障礙を起すもので、先天性のは子宮口が塞り、月經が外に出ない爲めに、下部に引き張るやうな疼痛を發して出血せず、期を定めて疼痛及び不快の感覺があり、危険の状態に至りますから、早く治療せねばならぬのであります。又後天性のは、子宮の頸管が狭くして殆ど閉塞し、妊娠しがたいものであります。萬一妊娠するとき、出産がむづかしいと云ふので、どうしても手術を要するのであります。この病氣

は、窒扶斯、實扶垤里亞、梅毒、新生物、猩紅熱、虎列刺、炎症等の後に發し、又分娩に際して子宮口などを損傷したり、その他不注意なる手術に基づくことがあります。

(一七) 外陰部病氣の話

外陰部の病氣中、外陰部の畸形と云ふのは、尿道が裂けて、腔内に開いて居るのがあり、又上に裂けて居るのがあり、陰核甚だしく肥大して陰莖のやうになり、大陰部が陰囊のやうになつて居る女性半陰陽があり、手術して治るのがあり、又治らないのがあります。陰門の肥大は、手淫に於て最も多く起り、又一時性浮腫は腎臟病の一徴候として來るのであります。又陰門の變形は、手術を要するのであります。

陰門炎は、處女膜より外方に於ける炎症を稱したもので、強姦等の外傷、白帶下の刺戟、肛門より出づる蟻蟲の轉入、股間内面の摩擦、過度又は拙劣なる交接、最も多

くは瘰癧傳染より來り、又濕疹等より來るものもあります。その中割合に無害なのは、脂肪過多の婦人に起るのであります。初め腫れ脹れ、色が紅くなり、小陰唇は紅くなつて、膣口を塞ぎ、分泌せる膿は悪臭を放ち、濃きより淡きに變じ、或は化膿し、歩行起臥の際には、特に疼痛を覺えます。これには急性と慢性との二つがありますが、他の病氣より來るものは、その病氣を治するは勿論、平素陰部を清潔にし、身體を安靜にし、入浴を度々行ふやうにすることが第一で、醫療はその病狀に依つて施さねばなりません。

外陰部癢痒症は、外陰部の癢痒さに堪へぬ病氣で、白帶下（殊に糖尿病の）月經、子宮又は尿道の病氣、手淫より起り、妊娠中には殊に多く來り、臥床に入り、又は暖を採るときには、非常に癢痒を増すもので、爲めに炎症を起す營養不良に陥り、不眠、憂鬱等の諸症に陥ることがあります。座浴などをするのは、最もよいのであります。

他の病氣が原因となつて居るものは、先づこれを治すことを勉めねばなりません。その他陰門の腫瘍は、猶子宮の腫瘍の如く種々あり、象皮病、乳頭腫、囊腫、脂肪腫、纖維腫、肉腫等種々の腫物がありますから、異狀があつたならば早く治療を施すのであります。

（一八）處女膜の病氣の話

婦人の陰部は、通例處女時代に於て處女膜がありまして、膣口の半を閉ぢて居るのであります。既に消失すべきに於ても、尙之を存し、或は堅く、或は柔く、種々の形を以て残留して居り、月經及び分泌物を困難ならしめ、及び交接又は出産を妨ぐるものがあります。斯う云ふ時には、切開或は切除を要するのであります。次に處女膜が全く閉塞し、處女期にも月經が來らず、陰部に腫瘍を生じ、粘膜様のものに覆は

れ、且つその膜は、次第に擴るなどのことがあります。それに對して手術を施します時には、多量の血液を排泄し、諸症状が一時に消滅いたします。

(一九) 膣の病氣の話

膣にも種々の病氣があります。即ち膣の缺損、膣の閉塞の如きは、月經を洩らすことさへ出来ません。そして他の病氣を起し易く、手術を要するのであります。双膣と稱して、膣の中間に壁があり、二つの膣のやうになつて居るものもあります。無論、中隔を切り除かねばならぬのであります。

膣の轉位と云つて、通例の膣よりは、前後に轉屈して居るのがありますが、子宮轉位と同じき治療を要するのであります。

膣炎は、處女膜より上の方から、子宮の口に至る膣の粘膜炎の炎症でありまして、原

因は麻毒の傳染とか、不潔なものが入つた爲めとか、子宮内膜炎の白帶下、陰門の炎症、肛門の蟻蟲その他より起つたもので、別けて麻毒の傳染より來つたものが多いのであります。急性のは局部が腫れ脹れ、灼かるゝやう、壓し付けらるゝやうな痛みがし、惡寒發熱、尿を頻りに催し、分泌物は多くなり、交接にも快味を感ぜず、妊娠しないやうになります。之が療法としては、局部の清潔法を主とし、月經時の勞働を避け、便通を整へ、適當なる局所の洗滌をも試みねばなりません。

膣瘻は、膣口の神經が非常に過敏となり、何物も觸れることが出來ない位であります。これは膣口の非常に狭く、又は處女膜の硬い爲めに、交接に依つて急に起り、又は次第に起るのであります。斯る人は、早く醫師の治療を乞はねばなりません。攝生法としては、身心を安靜にし、交接を避くるを急務とします。

その他、膣の腫瘍などがありますが、極く稀れなことでありますから略することゝ

します。

(二一〇) 尿道の病氣の話

尿道の病氣中、尿道炎は、多く痲毒の傳染に原因し、癌腫の膿の入りて起ることもあり、外傷等より來ましたものは、疼痛が最も甚しいのであります。尿をするときは、劇痛に堪へられないのであります。その他尿道の官能障礙あり、尿道粘膜の脱出あり、尿道の腫瘍あり、尿道の上裂及び下裂症があります。何れも尿道に異状ありと認めましたならば、醫師の指揮に依り、攝生する外はありません。

(二一一) 膀胱加答兒の話

膀胱加答兒と云へば、尿の袋の病氣でありまして、急性と慢性との二つがあります。

急性のものは、尿意の催すことが數が殖えて、一時間に三度も四度も便所に行き、放尿に當りましても疼痛を起し、血が混つて出たり、熱が發すると云ふ容體であります。慢性のものは、さう一時には來ませんが、或時は前述の如き異状があつたり、或時はさう云ふ異状がなかつたり、何時となく來りて尿は濁るものであります。膀胱加答兒は、婦人に能くある病氣で、随分苦しいものであります。その原因と云へば、矢張り男子の痲毒に感染して來たものが多いのであります。中には冷えから來るものもあります。この病氣に罹りましたときは鹽氣とか藥味とか、刺激性の食物を避けまして、牛乳の如きものを用ひ、身心を安靜にして、温くして居るのがよろしいのであります。膀胱加答兒がひどくなりますと、輸尿管を傳つて腎臓炎を起すことがありますから、餘程注意をいたしませんければなりません、因に俗に申しますところの消渴は、以上の尿道及び膀胱の病氣を總稱したものであります。

(三三) 卵巢の病氣の話

卵巢の病氣は、月經のある時代に多いのでありますが、幼女や老婦にもあるもので、傳染病殊にその腐敗性のものより、又は結核より、腹膜の病氣より發するものもあれば、往々にして、亂暴なる淫慾に依つて發することもあります。その他卵巢の轉位、卵巢炎、卵巢の腫瘍などで、逐一之を擧げることが出来ません。卵巢が悪いと云へば、直ぐ卵巢囊腫と考へることが多いのでありますが、普通、卵巢炎であることが多いのであります。卵巢の腫瘍中、癌腫は最も悪性であります。卵巢囊腫は、良性であります。卵巢囊腫の病狀は、下腹部が時々痛み、左側又は右側に瘤が出来まして、腸や子宮を壓迫すると云ふやうな病狀が現れますが、別段苦痛を感じない人もあります。されど餘り長く放置するときは、周圍の臓器に癒着し、爲めに命を終ることがあ

りますから、囊腫なりと診斷が確定しました上は、一時も早く開腹術に依つて、摘出して貰ふことを躊躇してはなりません。

(三三) 喇叭管の病氣の話

子宮附屬器たる喇叭管は、毎月卵巢より分離する卵を子宮内に輸る大切な管であります。子宮にも卵巢にも通じて居るものでありますから、随つて病氣に罹ることも多いのであります。この病氣は、水腫、血腫、膿腫、轉位、新生物、畸形、妊娠等の數種に區別されて居ります。その最も多いのは炎症であります。炎症は獨立に起るものではありません。必ず子宮等の他の部の炎症より波及するものであります。即ち其の初めに於て、外陰部、尿道若しくは子宮の炎症に續いて、下腹部又は兩側に於て、専ら痛み、初めは餘程間を置くけれども、後には陣痛のやうになつて劇しく痛み、殊

に月經、交接、勞働等の際には最も甚しく、往々熱を發して腹膜を刺すやうに痛み
 消化不良、便秘、貧血を來して瘦せて衰へて來ます。或は歇斯的里のやうな状態を呈
 して來るのであります。月經は正しく來らず、量多くして疼痛を伴ひます。過泄性喇
 叭管炎は陣痛の如き疼痛が續いた後、多量の液を漏らします。この病は病婦が一時劇
 しい疼痛を感じ、液を泄した後、子宮の側にある囊腫は、忽ち消え失せて、俄に輕快
 になつたやうな心持になります。又喇叭管血腫は、喇叭管妊娠に續いて發したるもの
 でなければ、量の少いのが尋常であります。時としては、少量の出血にても、急性
 貧血を來しまして、後に快復します。強烈なる堅く締める疼痛を發して、喇叭管囊を
 破れるとき、幸に出血が止ればよいのですが、その他の場合には、貧血が甚しくな
 り、腹腔から出血して、治療も出來ぬことになります。又喇叭管囊腫は、劇しい疼痛
 と共に、惡寒發熱を伴ひ、非常に瘦せ衰へます。慢性のは、次第に膿液がなくなつて

癒着するのであります。時として腸管や膀胱に穴が明いて、膿液を泄すことがあり、
 危険になります。併し片側の喇叭管さへ健全でありますと、妊娠することが出來ます。
 療法は種々ありますが、最も初期に當つて、身體殊に生殖器を安静にし、交接を嚴禁
 すればよろしいのであります。又多少慢性期のものでありますれば膿を洗滌し、沃度、
 グリスリンなどのタンポンを挿み置き、疼痛に對しては、下腹部の電法などを施した
 りすることがありますが、其の病狀に依り、醫師の指揮に依る外はありません。そ
 の他喇叭管の妊娠は病的でありますから、喇叭管の病氣の一つになつて居ります。子
 宮外の妊娠は、往々にしてあることでありますから、妊娠のやうでも、少しく變だと
 思つた時には、直ちに婦人科醫師に診斷を乞ふ必要ががあります。萬一にも喇叭管妊娠
 でありますと、巧妙なる開腹術に依つて、初めて助かると云ふことを知つて置かねば
 なりません。

(二四) 骨盤周囲の結締織炎の話

骨盤周囲の結締織炎は、多くは産褥熱から来るものでありますが、初めは骨盤の内
 て甚しき熱を發し、消化不良となり、腰が痛み、大小便の通じが悪しくなり、子宮
 より水のやうなものが下りるのであります。この病氣は早く治せば治るのであります
 が、慢性になりますと、炎症性癒着を起しまして、それが爲めに子宮の位置を變へた
 りするやうになり、不妊症を起すこともあります。この病に罹りましては、特に身體
 を安靜にしまして、腹部に冷濕布或は温濕布を充てがひ、攝生すべきであります。

(二五) 婦人生殖器の結核

婦人生殖器の結核は、肺若しくは腹膜結核のある人に来り、或は交接、諸物、手淫

等に依り感染するものでありますから、餘程平素の注意を要するのであります。結核
 は生殖器中の何れをも犯すことが出来るのであります。この特徴として、他の病氣
 と紛れ易く、月經なども病狀に依りまして、或は多く或は殆んどないのであります。
 只白帶下の如き乾酪やうの物が出ましたら、大に注意しなければなりません。豫防と
 しましては、結核の人と結婚せず、結核の産婆を頼まず、結核又は結核の疑ひある
 のに接近せず、消毒しない物を陰部に觸れないやうに注意することでありす。

(二六) 婦人生殖器の痲疾の話

婦人の痲疾は、男子の如く單純のものでなくして、頗る複雑且つ頑固なものであり
 ますから、早く治療しませんと、生殖器の全部のみならず、泌尿器及び腹膜をも侵す
 やうになります。初め陰門に来り、腫に發し、一方には尿道より膀胱腎臓を侵し、他

方には子宮其他に至るのであります。即ち陰門及び膈炎あり、尿道炎あり、子宮痲疾あり、喇叭管痲疾あり、卵巢炎あり、骨盤結締織炎あり、遂には腹膜炎を發することがあります。その病状は一定して居りませんが、多くは交接に依つて、男子の痲毒菌が膈内に達したるときには、急性の炎症を發し、膿を多く出し、膈は過敏となりて、鮮紅色を呈し、陰唇間は、糜爛れ潰れて仕舞ひ、尿をするにも、交接をするにも、疼痛を感じます。膈より泄す膿は、初め黄色の濃いので妙な臭氣があり、少しく血が混つて居りますけれども、末になりますと、却つて淡く灰白色になるのであります。全身療法としましては、身心を安静にし、陰門を清潔にし、便通を整へ、酒その他刺激性の飲食物を禁じ、交接を嚴禁し、一時も早く適當なる治療を受けねばなりません。不妊症の原因となることは、この病氣に最も多いのであります。尙ほ子供の尿道炎などは、多くある病氣であります。その多くは母に痲毒性子宮疾患等あり、之が入浴

等に依りて、手拭などに依りまして、傳染して發することがありますから、母に於て白帶下などの多量に下りますときには一層の注意を拂ひ、子供の手拭と、自分のとを嚴重に區別し、最も母の手の消毒を嚴重にするやうにすべきであります。

(二七) ヒステリーの話

ヒステリーは殆んど女子特有の病氣の如く、日本の婦人には多いのであります。原因は、神經病の遺傳もありますが、婦人病より起るものが最も多いのであります。その他精神感動より、貧血より、重病後の衰弱などより起るもので、青年中年の婦人に多いのであります。この病氣は神經が頗る過敏になりまして、我儘になり、哀み易く、怒り易く、泣き易く、嫉妬心が強くなり、總じて七情に脆く、記憶が悪くなり、月經不順にして、顔色蒼く、頭痛、眩暈、多汗、發熱、便秘、消化不良、不眠、癡癡、麻

痺、その他の異状があります。之が療法としましては、病氣に原因するものは、その病氣を治し、身體の衛生に努め、本人よりは、側の人が大に注意して、精神を平靜ならしめ、修養又は信仰上の談話を聞かしむることとであります。

妊娠を如何にして知るか

(一) 月經閉止と妊娠

妊娠は申す迄もなく婦人の大役でありまして、常に妊娠せる徴候に就いて知らずに居りましたならば、或は妊娠しました事を知らずに不攝生でもしましたならば、母子共に飛んだ不幸を來すのである。今妊娠は如何にして認定し得べきかと云ふに、それは昔から言ひ傳へられたやうに、月經が俄に閉止するを以て、最も認め易い徴候とし

てありますけれども、只管こればかりを以て、直ちに妊娠なりと早合點いたしますと、往々にして誤ることがあります。一體月經が俄に閉止すると云ふことは、單に妊娠の時ばかりではないのであります。婦人病その他の疾病の爲めに、さう云ふ事もあれば、又これと反對に妊娠しましてからも、稀に月經のやうな子宮出血を見ることがあります。ですから妊娠を認定いたしますには、月經が閉止したと云ふことのみを以て極める譯には行きませんので、月經閉止の外に左に記しますやうな種々の徴候を檢べねばならぬのであります。

(二) 乳房の徴候

先づ其の徴候は乳房であります。乳房は妊娠しましてから、二ヶ月に變状を呈することになつて居ります。即ち次第に膨脹れて來まして、之れに手を觸れますと、平素

より温暖であります。猶ほ進んで第四ヶ月乃至第五ヶ月に至りますと、乳嘴と乳量とが暗黒色となつて、皮の下の静脈が青い線のやうな形を表はし、又乳房の知覚も過敏となりまして、これに壓迫を加へますと、無色の液を乳嘴より分泌するやうになります。

(三) 腹部の徴候

腹部は月の進むに伴れて、胎兒が發育しまして、子宮が次第に擴りますから、次第に膨れてまゐります。而かも妊娠腺と申しまして、腹部の中央その他腹部全體に、褐色を帯びた腺のやうなものが露れ出るものであります。

(四) 容貌に現はるゝ徴候

婦人の顔色は、男子よりは膚目細く美しいのを常といたしますが、これには痣のやうなものが所々に色づいて、眉毛は脱げ落ちますし、容貌が何となく、平素とは違つてまゐるものであります。

(五) 妊娠と便尿

子宮の膨れて大きくなるに従つて、頻りに便尿を催して來て、度々便所に行つても容易に出ないことがあります。何故と云ふに尿を蓄積する膀胱は、子宮の前の方に位置して居ますし、糞便を蓄積して居る直腸は、子宮の後の方に、位置を占めて居り、子宮はその中間にありますから、子宮が大きくなると、自ら膀胱や直腸を壓迫しますから、之れに依つて右様の徴候を呈することになるのであります。



(六) 妊娠と悪阻

妊娠いたしますと、一時食欲が減少しまして、平素好んで居りました食物を厭ひ、却つて酸味其他の變つた味を嗜むやうになりますのが、普通の経過であります。併し往々にして妊娠二ヶ月乃至四ヶ月頃から、悪阻と申しまして、食欲は大に減少し、嘔吐を催してまゐりまして、一體に食物を忌み嫌ふと云ふ有様になります。これ等は大抵妊娠六ヶ月目になりますと、大分快くなり、食欲も出てまゐりますが、一層甚だしい悪阻になりますと、食欲が全く絶えまして、眼に食物を見るさへ厭になつて、全く營養物を攝ることが出来ませんから、身體は次第に衰弱するばかりで、甚だしいのは人事不省に陥り、嚙語などを發するに至ることがあります。少々のは案ずるに及びませんが、このやうな悪徴候を呈しますやうになりましたは、已むなく醫師に乞

つて人工墮胎法を行ひ、母體の生命を救ねばならぬのであります。假ひ人工墮胎法を行つても時として母子共に死することがありますから、豫め之に注意し、度々嘔吐を催す時は、速に婦人科醫の診療を請はねばなりません。

(七) 物に好惡の徴候

妊娠は斯くの如く、身體に異状を來しますが、常に身體ばかりに止まりません、精神上にも影響を及ぼし、平素の性質が一變したやうな有様になります。その模様は人に依つて違ひますが、概して知覺が過敏になり、憂鬱し易く、譯もなくして或は悲み、或は怒り、その上記憶力とか理解力とか減損し、甚だしく物に好き嫌ひをするやうな徴候を呈してまゐります。

(八) 妊娠と母體の病氣

誰方にも分り易い妊娠の徴候は、凡そ右に述べた通りであります。申す迄もなく、妊娠と云ふことは、生理的作用でありまして、病氣ではありませんが、斯る身體と精神とに變化を來した爲めに、病氣に對する抵抗力を非常に減じますから、餘程攝生をよくいたしませんと、病氣に罹り易く、胎兒にまで影響を及ぼし、爲めに生兒の一生を損ふと云ふこともありますから、妊娠中の衛生は、婦人の日常衛生中極めて重要なものとしてあります。

妊婦と産婦の注意

(一) 寒い時に出産の多い理由

暖かい春風のボカ／＼吹き初める二三月には、婦人の受胎が最も多いのであります。夫れが十月十一月十二月頃に出産となるのが、毎年の例に依ると一番數が多いのであります。

寒い時が一年中で最もお産の多い時でありますから、妊婦産婦はお氣を付けなさらねばなりません。お心得の二三をお話しして見やうと思ふ。

(二) 歸省してのお産は害あり

第一妊娠中にお氣を付けなさらねばならぬ事は乗り物の事でもあります。都賀に生活をなさる婦人の方に屢々お見受けすることがありますが、妊娠なさつてから段々出産が近くなると郷里の方へ歸省なさらうとする方が多いやうであります。

御自分も父母の膝下で出産をした方が安心だとお考へになつて、歸省を望みなさるやうでありますし、夫の方も夫れに越した事がないと御賛成なさるやうであります。

アレは醫者の方から見ると、誠に感心の出来ない事であります。

汽車や何かに乗るのは、如何かすると流産、早産の危険を伴ふものでありまして、

二時間乃至三時間なれば健康の人には差支へはあるまいが、夫れ以上になると、流産、早産を誘致しないとしても、難産に陥る事があります。

一體、安心して出産したいと云ふ事なれば、郷里まで態々多額の旅費を拂つてお歸りなさらなくとも、夫れよりもモット／＼安心の出来る醫者なり看護婦なり、産婆な

りが附切りの病院と云ふものがあるではありませんか。斯んな便利なものゝある都會から、事に依ると一里も二里も行かねば、醫者も産婆もないと云ふ様な、片田舎まで遙々お歸りになると云ふ事は、大層考へ違ひであると云はねばならぬのであります。

(三) 流産、早産、難産の原因

夫れから、少し申し上げ憎い事ではありますが、妊娠中から、出産後まで、大事な夫を留守宅に置き去りにすると云ふ事は、色々面白くない事が起ると思ひます。第一に夫の慰安がなくなりまますから、様々の悪い事が此の際に乗じてまゐります。道徳上の危険も此の時に起つてまゐりますし、衛生上取り返しのかぬと云ふやうな危険も此の際に起り易いのであります。

出産の爲めに地方へ歸省なさる事は、凡ての點から考へて私どもの賛成の出来ぬ

事でありませぬ。若し萬止むを得ず、歸省なさらなければならぬと致しますれば、妊娠六七ヶ月の時になさるのが、本人の爲めに宜しいのでございます。それは六七ヶ月の頃なれば、汽車や馬車に乗つて長距離を旅行しても、前に申述べた流産、早産、難産等を誘致する危険が餘程少ないからであります。妊娠の初期と、八九ヶ月頃には最も早産の危険が多いのであります。

乗物は汽車、馬車の外に、電車や人力車でも、平素慣れて居る人なれば、差支のないやうなもの、平素慣れて居ない方なれば、之を用ふる事は餘り面白くありません。殊に地方の山道などを車で上下するやうな事は餘程注意しなければならず、寧ろ之を避けねばならぬのであります。

(四)「むくみ」に對し必要な知識

次に「むくみ」の事ですが、之は舊式の思想に囚はれて居る人は、お産さへすれば「むくみ」は自然に除れるものであるなど、信じ、少しも之を氣には掛けないやうですが、誠に宜しくないと思ひます。

單に「むくみ」と稱するもの、内にも、自ら區別がありまして壓迫性浮腫と稱する方の「むくみ」なればお産をすれば自然に直りますが、脚氣から來て居る「むくみ」になりますと、之を放棄して顧みない時には腎臓炎を惹き起す事があります。

腎臓から來るものには字癩と云ふ病氣を起す憂ひがありまして、此の字癩に罹ると、痙攣を起したり、引きつけたり、悪くなると齒を喰ひしぼり、手當を怠つて命を失ふやうな取り返しのつかぬ事になることがあります。斯んな時は、應急手當として普通産兒を出して了ふのですが、手術さへなければ親も子も助かります。

單に脚氣から來る「むくみ」でも、之も餘程氣をつけないといけません。脚氣の人

は不斷心臓が弱つて居りますから、夫れが産の爲めに、非常な努力を用ひます爲めに、一層心臓を弱らせ、遂に衝心を起して一命を失ふやうな事が往々あるのでございます。

衝心を起さないまでも、出産後腰が脱けて永い間苦しまなければならぬやうな事もあります。又母親が脚氣であるから、自然其の乳を呑む生兒までも脚氣に罹つて、發育が餘程悪くなるやうな事もありますから、斯る場合には母乳を吞ませぬやうにしなければなりません。

(五) 産後の肥立と一家の幸不幸

脚氣は普通男子に多い病氣で、女子には餘程少い病氣ですが、その女子も妊娠時には脚氣に罹り易いのですから、「むくみ」があつたなら、兎も角も醫師の診断を乞ふ事

が必要でございます。診断は尿の検査や其他の方法に依つて見るのですが、何れにしても妊娠中に直して置かねばなりません。

上流の家庭でも、妊婦産婦の肥立の悪いのは一家をして沈鬱ならしめ、家族の幸福を非常に滅殺するものでありますが、況して中流以下の家庭では、主婦が一切の家事を切廻して居るやうな場合に、産後の肥立が宜ろしくないやうな事がありました。一家の不幸は之より大なるものがありますまい。

此の産後の肥立の善悪は、主として妊娠中の衛生が行届いて居ると居ないとに關係しますから、婦人は平素此等の事柄に就きましては、出来得る限り注意を怠らぬやうにありたいものであると思ひます。

妊娠中の衛生的注意

(一) 精神に對する注意

妊娠は今更申す迄もなく昔から婦人の大役と申して居ります。さて妊娠いたしますと、身體は固より精神上にも變化を來しまして、此の變化に因り、反射的に消化力を障へ、悪阻等の恐るべき病氣を誘起するのが常であります。それでありませうから、妊娠中には、殊に精神を安静爽快にするやうにいたさねばなりません。それで妊娠中はなるべく家事上の事も心配しないやうにし、詩歌繪畫又は音樂などに依つて、耳や目を樂ましめ、時々戸外の運動を試み、雑沓しない庭園内又は郊外に、夫婦相携へて散歩したりなどして、精神を慰むるやうにするのがよろしいのであります。又偉人の傳

記などを讀み、精神を高尙ならしむるやうにしたなら尙更よろしいのであります。これ等は古來胎教と申しまして、胎兒に好き感化を及ぼすことは、普く人の知る所であります。又舅姑たり、父兄たり、夫たる人は、出来るだけ、妊娠を慰め、大抵の運失は大目に見て、心配事はなるべく知らせないやうにせねばなりません。

(二) 妊婦の居室と散歩

妊婦の居室はなるべく、夏は涼しく、冬は暖かなる南向の日射りの好い處で、濕氣を含ませぬやうにせねばなりません。又外出するには、夏は朝夕の涼しき時刻、冬は日中の暖き時刻を選び、暴風又は雨雪の日を避けたら宜しいでせう。衣服なども温度の變換に注意して、程よく着るやうにし、成るべく清潔で軽いものを用ひ、就中皮膚に密接する襦袢は、毎日着更へる位にして、不潔でないやうに注意せねばなりま

せん。

(三) 腹帯の締め方

これ迄我が國に用ひられて居る腹帯と云ふものは腹部を温かに保ち、子宮の動搖を避けるなどの、大なる効力があります。けれど餘り固く緊めますと、胎兒の發育を妨げ、母體の血液循環を害しますから、注意して全腹部を緩く纏ふやうにせねばなりません。而して之に用ひるものは、フランネルを一番よしとし、次に晒布を良しとします。

(四) 過劇の運動を慎め

妊娠中に重き物を擔ひ、水桶を提げ、又は遠路を歩行し、峻坂を登り、階段を上り

下り、汽車、馬車、人力車等に乗り、その他過劇の運動をしてはなりません。又歩行に意を用ひ、躓き倒れのやうせねばなりません、ですから履物は草履又は靴を用ひるが宜しいのであります。

以上の條項に注意しませんが、往々胎兒の位置に變化を來し、之が爲めに非常なる難産の原因となり、或は流産を起すことがありますから、恐れ慎まねばなりません。

(五) 就寢起床を規則的にせよ

妊娠中は神経過敏に陥り易いものですから、睡眠時間を一定し、だらしないことをしてはなりません。夜は成るだけ早く寝て、朝は夙に起き、戸外の運動を試み、新鮮の空氣を吸ふやうにせねばなりません。かの夜更しの如きは大禁物であります。

(六) 身體を清潔にせよ

妊婦は常に頭髪を清潔にし、櫛笄又は髻などは、成るだけ用ひない方が宜しいのであります。入浴は努めてするやうにし、身體を清潔にし、血液の循環を促し、分泌排泄を催さるやうにするのであります。入浴の回数、隔日一回位であつて、時間は十五分乃至二十分位に止めて置きます。それ以上に長湯をすると、却つて腦貧血を起し、時に卒倒することがあります。

(七) 身體下部を清潔にせよ

妊娠中は特に身體の下部を清潔にする爲めに、毎日腰湯を行ひ、又はイリリガートルに微温湯を入れ、局部を洗滌はねばなりません。この手當を怠る時は、妊娠時には、

分泌物が多いのですから、これが、そのまはりに附着し、その刺戟の爲めに癢痒を來し、皮膚を糜爛することが往々あります。

(八) 乳房の保護

乳房は分娩後小兒を養ふべき最要の機關でありますから、十分之を保護せねばなりません。之を清潔ならしむるは固より、皮膚の薄い時は、アルコールを用ひて時々拂拭し、摩擦し、乳頭の發育不十分である時は、軟かに揉み、且つ引伸ばしを試みるやうに致します。

(九) 妊婦の食物と善悪

妊娠中は、己れの攝取した營養分を胎兒に分け與へるものでありますから、平生よ

りは餘分に滋養分を食べねばなりません。彼の産後の肥立ちが悪いとか、小兒の發育が不十分ななどは、大抵母體の營養不十分なるに因るのであります。此のやうに多くの滋養分を要しますけれども、妊娠中は動もすると、消化器を侵されますから、淡泊で消化し易い營養物を取るやうにせねばなりません。これに適するものは、牛乳と鶏卵とであります。その量は一日牛乳は三合、鶏卵は六七個を要します。俗に牛乳五勺鶏卵一個位で滋養が十分であると云ひますが、このやうな少量では、餘り効能がありません。而して牛乳は往々病根となるべき微菌を含んで居りますから、必ず一回沸騰したものを用ひねばなりません。鶏卵は半熟若くは炙りたるものを用ひたらよろしいと思ひます。生なものも、亦煮過ぎましたものも、消化が宜しくありません。ソップは滋養價格が乏しいけれども、消化を促進する効能がありますから、成るだけ飲んだ方がよいのであります。

牛肉、豚肉、鳥肉及び魚肉等の肉類は、滋養價格が多いから、努めて食すべきものであります。餘り脂肪分の多い所は不消化でありますから、獸肉類は脂肪の少き部分、魚類は脂肪の少き品を擇んだらよろしいと思ひます。調理法は煮たのでも炙つたのでも宜しく、又刺身も宜しいのであります。罐詰類、干物類等には、不良のものがありますから、食べない方が安全であります。

野菜類は、凡て新鮮なるものを選ばねばなりません。而して芋、南瓜、筍、牛蒡等の如きはなるだけ用ひない方が宜しいのであります。總ての菜類及び胡蘿蔔、大根等は宜しく、香の物なども、少量を採れば差支へはありませぬ。

餅、赤飯、鮎などは消化しがたいものでありますから、食べない方がよろしいのであります。

菓子類は糖分の少いのを用ひたら宜しいでせう。糖分が多いと腸胃を害します。故

にビスケットのやうな西洋菓子類を適當とします。

果物類は、人々の嗜好によりますから、禁ずる譯に行きませんが、妊婦は往々之を貪る癖がありますから、多量に食べないやうにせねばなりません。

香辛料類は先づ用ひない方が宜しいのであります。

以上申しました妊婦の食物の注意は、要するに平素慣れて居る食物を改むるに及ばず、成るべく少量にして滋養多く消化し易いものを選んで調理し、一度に多量を攝らず、一日數回宛食したら宜しいのであります。但し就寢前に飲食することは固く禁せねばなりません。

(110) 便通に注意せよ

妊娠中には便秘し易いものでありますから、便通に注意せねばなりません。即ち毎

朝食盪水若くは清水一碗を飲んで、庭園の散歩を試みるなどが宜しいのであります。そして假令便意がなくなるとも、努めて一度圃に行く習慣を作つて置きますと、自然に便利を得ることが出来ますので、便秘三日に渉る時は、灌腸若くは鹽類下劑を用ひるなど、産婆に相談なさるのがよいのであります。

尿は月の重るに随ひ、度数が多くなるものであります。若しその量が減つて、尿道に痛みがあることなどありました時は、速に婦人科醫の診断を乞はねばなりません。

(111) 浮腫の注意と雙生兒

妊娠の末期には、往々兩脚に浮腫を起すことがあります。世には之を構はずに置く人もありますが、注意して豫防すべきであります。浮腫を避くるには長く坐し、長く起立して仕事をしてはなりません。臥する時には、成るべく足を高い所に擧げて置

くが宜しいのであります。このやうに豫防しましても、尙ほ脚及び全身に浮腫を來たしました時には、直ちに醫師の診斷を受けねばなりません。雙胎妊娠は時として現はるゝものであります。外國の統計に依りますと、八十四回の分娩に就いて、雙胎一回の割合だと云ふことであります。雙胎の胎兒は、その發育が不十分なものでありますけれども、胎内に二胎兒のある所からして、母體に取つては、通常妊娠よりも多く身體の障礙を被るものであります。故にその攝生法は、殊に注意せねばなりません。雙胎の鑑定法は素人には判明し難いのですから、産科醫の判定を請はねばなりません。

妊婦の罹り易き脚氣の豫防法

(一) 警戒すべき妊娠の水腫

脚氣患者は比較的男子に多く、女子には少ないのでありますが、女子も一旦妊娠すると、特に脚氣に胃されやすい體質になつてまゐります。

そこで、脚氣の病状はと申しますと最初、足がはれて麻痺れ起居に少からず不快を感じると同時に食慾は次第に減退し、病状の進むにつれて全身にむくみを持つてまゐりますが、最も危険なのは心臓を胃されることです。之が爲に心悸昂進が著るしくなります。

分娩時の苦痛は妊婦の誰れも味はねばならぬ一大關門で、其時の産婦の努力は大變

なものです、妊娠中健康な人でも、此場合は餘程衰弱するものでありますが、若し産婦が脚氣患者であるやうな時は、往々にして脚氣から来る心臓麻痺に襲れます、幸ひにして無事に分娩したとしても其脚氣患者の乳をやると、幼児は忽ち乳兒脚氣となつて便秘するとか、乳を吐くとか又は聲をからすとかして、やがて死してしまひます。水氣が来たと素人の申しますのは最初足がはれ、進んでは全身に水腫を持つやうになつた時であります、此の水腫はあながち脚氣許りでなく、妊娠によつて特に水腫をもつことがあります。之は壓迫性浮腫と云つて、大抵の婦人は胃されます。「妊娠中の腫みは心配はいらぬ、お産をしてしまへば直ぐ全快する」と昔から云はれ、妊娠に水腫は付きもの、如く考へられて居りますが、之れはとんでもない心得違ひです。前にお話した壓迫性浮腫の場合ならば別に障礙もありませんが、同じ水腫れの病状を持つて居る脚氣又は腎臓炎などから来たとしたならば、一刻も油断は出来ないものでありま

す。水腫は大抵の場合、以上の三つの原因から来るものですが何んでも壓迫性浮腫と心得て、等閑にして置いては宜しくありません。之れは一般婦人のよく注意せねばならぬことで、殊に五六月から秋にかけては此の種の病氣が最も多い時でありますから、少しでも水腫を催したならば、早速醫師の診察を請はねばなりません。

(二) 馴れた仕事は差支なし

豫防法は種々ありますが、先づ第一に注意すべきは妊娠中の食物であります。併し妊娠中には食物に對して平常と全くちがつた種々なる好き嫌ひが出来るもので、平常甘い物の好きな人もそれが全く嫌ひになり又は酸味の勝つた物のみを好んで食物としたりしたがるものですが、それは精神的に或る程度まで矯める必要があると思ひます。食慾があるからと云つて無暗に消化不良の物を攝取し、或は滋養分の乏しい淡泊な

物のみを食するなどは戒むべきことで、自分の體の如何を考へて食物の適不適を宜く呑み込み、たどひ不味くとも麥飯をとる方が宜しいのです。

營養不良の恐るべきことは誰れも承知して居る處であります。妊娠中は殊に營養分の攝取選擇に意を用ひねばなりません。何故と申しますと、從來の統計上營養不良の妊娠程、脚氣或は腎臓炎に、胃され易いと云ふことを示して居るからです。

食物の攝取時は、勿論一定するに越したことはありませんが、妊娠中は往々にして胃腸の働きを弱め易いものでありますから少しづつ一定の時を隔て、一日五回位に食するのが宜しいのです。酸ばい物が食べたいからと云つて無暗にそれを間食し、肝心の三食をば一向に見向きもしないなどは困ります。斯ういふ事は母體の健康を害するは勿論、大切な胎兒の發育にも大に有害であります。妊娠中は一般に體がだるくなるもので、暇さへあれば直ぐ横になつて寝たがるものであります。決して放縱な習

慣をつけてはいけません。妊娠以前に仕馴れた仕事、例へば雑巾がけとか洗濯とか、或は裁縫、料理のやうなことは妊娠中と雖も決して差支へはありません。勿論、重いものを持つとか過度の労働をするとかは絶対につゝしむ可きであります。日常生活に必要な極く普通の仕事は、寧ろ怠らず勤める事が最も必要です。

初産の人或は、結婚後數年にして初めて妊娠の喜びにあへる人などは「大切に〜」と無暗に大切を取る結果、極く平凡な仕事さへも女中委せ或は他人の世話になつて、妊娠に必要な運動なご少しも致さぬ向もあるやうですが、是等は母體にも胎兒にも悪影響はあつても、決して効果を認めることは出来ません。妊婦の衛生殊に脚氣の豫防法としては是非共適度の運動は必要であります。

(三) 長途の旅行は大禁物

妊婦に運動の必要なことは前述の通りですが、餘り運動に重きを置き過度に陥らぬ注意と共に、是非わきまへねばならぬ事は長途の旅行の有害なことであります。兎角妊婦中は氣鬱になり勝つものですから、氣保養の爲めに見物に出掛るときか、或は冷え込むといけぬから温泉にでも出掛けて温まらうとか云つて、わざ／＼汽車にゆられて長途の旅行をする方もありますが、温泉場の空氣に棲息することは有効でも汽車にゆられる事は絶対にいけません。殊に妊娠して四ヶ月頃まで、又臨月の一二ヶ月頃よりは最も注意すべき時期で、流産などの悲しみを見るのは往々此の月頃旅行した人に多いのです。

是非旅行せねばならぬ場合は妊娠六七ヶ月頃を見はからつて致せば宜しいですが、これとても止むを得ぬ場合の外は成る可く避くべきは申すまでもありません。

妊娠中若し便通がなかつたならば、早速醫師の診察を請はねばなりません。素人療

治の下劑などは往々にして流産の原因ともなりますから、若し下劑をかける必要のあつた場合は、醫師の命令のもとにいたさねばなりません。便通を宜くする法としては毎朝清水に鹽を入れてコップに一杯づゝ呑むのも、確に有効であります。

以上お話ししたことは妊婦の衛生と同時に脚氣の豫防法ですが、特に妊婦の注意すべきことは、營養と便通と適宜の運動とを最も秩序的に實行することです。然し不幸にして一朝脚氣に胃されたならば、總てを専門の醫師に委せ、其の命令に依つて治療をするより致し方ありませんが、なるべく斯様な病に胃されぬやうに、前述の豫防策を會得して、無事に目出度き産の紐を解くことを心掛けねばなりません。

お産をする時の心得

(一) 通常分娩と異状分娩

分娩とは、妊娠十ヶ月、詳しく申しますと、四十週目に、小児が母の体内から出て此世に現れる時のこととありまして、婦人天職の第一でございます。この時の衛生を忽にいたしますのは、結局女子の天職を盡さぬのでありますから、その衛生には大に注意いたさなければならぬのでございます。

それでこの分娩には、普通の安産と云ふのと、困難なるものと斯う二通りありまして、醫師の方では之れを通常分娩、異状分娩の二種に區別いたして居ります。この異状分娩の時は、何うしても醫師の手を煩はしませんと、時に大なる間違ひが生ずるの

でございます。通常分娩に就きましても、世間一般が心得て居らぬやうでございますから、先づこの事に就いて述べて見やうと思ひます。

(二) 分娩する時の順序

普通、分娩の前に當りまして、二三日間或は一週間位腹部より腰部にかけて、時々痛みが起りますもので、俗にこれをしきりが来ると申して居りますが、醫學上では前陣痛と云つて居ります。而してこの前陣痛が済んで、愈々眞の陣痛が来るのですが、日本人でありますと、眞の陣痛が来ましてから、初産婦ならば十二時間、二度目以上産をする人ならば六時間位を経過して分娩を終るものであります。この陣痛が起りましてから、分娩を終るまでの時間を、三期に區分して、開口期、産出期、後産期と區別しますが、その陣痛が起りましてから、子宮口が開いて小児の頭が通過し得るや

うになるまでには、初産なら十時間、二度目からは五時間も掛ります。而してその口が開きますれば、羊水と云ふものが下ります。俗にこれをみづを見ると申します。その羊水が出て仕舞ひまして、初めて子宮外に小児が現はれます。その時間は二時間以内であります。その後十五分乃至二十分を経過いたしましたして、胎盤が出ます。これで分娩が終るのですが、總じて各期とも、この時間以上を要することがありまして、殊に胎盤が三十分以上も掛つて下りませんのは、異状分娩でありますから、早速醫師の診察を受けねばならぬものであります。

(三) 分娩時の衛生的心得

これから分娩の用意と心得とについて申します。前陣痛が起りました時は、愈々分娩が近づいたと心得て身體を清潔にしなければなりません。又努めて毎日入浴せねば

ならぬのでございます。そして其の時間は十五分位と定めて置きます。申すまでもなく、身體全部を清潔にして、殊に其の下部は朝夕二回づつ洗つて置きたいものであります。とりわけその時、自分或は夫に淋病、或は微毒性の病がありましたら、申すまでもなく、假ひその以前に、これ等の疾病に罹つて醫藥を受けて全治しましたも、この際に嚴重に消毒しなければなりません。弱き石炭酸液か何かで局部を洗滌つて置かねばなりません。それは分娩に際して、これ等の病毒がありますと、小児が産道を通過するに當りまして、その病毒が胎兒の眼或は鼻等に八る憂ひがあるからであります。

(四) 産室は如何にすべきか

愈々眞の陣痛が起りましたならば、直ちに産室と産床の準備を始め、妊婦も相當の

用意をせねばなりません。産室は及ぶだけ煩累の少い静かな部屋を選ばなければなりません。その他空気の流通光線の射入等大に注意せねばなりません。且つその室には不用の品物を置かぬ様にし、成るべくそれ等の物は、他の室に移し猶十分に清潔にして、ホルマリン液を霧吹きにて吹いて消毒を行ひ、風も一度位は通して置く必要があります。この産室のことは、餘程注意しませんがなければならぬもので、これを忽せにしますと、産婦に疾病を起させ、随つて胎兒にも影響があるものであります。

(五) 分娩具の準備の仕方

分娩具は、只今では大抵の薬舗か、醫療器械の販賣店で買つて居りますが、これ等を得るに不便の地方に居る人の爲めに申しますと、褥が一枚敷直が二枚、小兒の臍帶、臍帶の盤結糸、胎盤網器、ガーゼ敷反、脱脂綿敷枚、油紙製の袋三四箇等であり

ます。産床は成るべく部屋の中央の位置に据ゑて、何の方面からも産婆或はその助手が事を執るに、都合よくして置かねばならぬのであります。而して産室の一隅又は別室に、分娩具を入れてあるもの、及び豫て産婆より送り來てある消毒液、タオル、母體の腹帶及丁字帶、金盥二三箇、便器、石鹼、手拭等を備へて置くべきであります。この他に出來ますことなら、小兒の寢床は別室に用意して置きたいものであります。そして若しこれが冬季でありますならば、母子の室双方共、暖爐若しくは火鉢等にて室内を暖め、湯タンポ等の用意もいるのであります。これ等の準備をしまして居る間に産婦は便所に入つて、兩便を済まして置くのであります。併し羊水の漏れました後は、斷じて便所に入つてはなりません、誤つて小兒を便所へ産み落す虞れがあるからであります。斯くして産婦は産床に入るのではありませんが、その前に總て、身體を洗つて寛瀾な着物に着換へ、櫛笄等一切の物を除けまして髪を解いて産床の上に仰臥

若しくは横臥するのであります。ことに注意いたしますが、決して産床の上に坐つてはなりません。而して床に入つて後に、又局部を洗滌して貰つて置くのであります。斯う云ふ風に産婦が産床に入つた後は、一切の事を産婆に一任して、家人も二三人の外はこの室に入入してはなりません。

(六) 産床に入りし時の注意

又産婦は産床に入りました後に、分娩は生理的のものであつて、天然に出来るものであると心得て、静かにその経過を待たねばなりません。陣痛の始めからいきむ人がありますが、これは愈々産出期となつて、この力を弱むるものでありますから、何でも自然の痛に委し置いて、産婆がいきんで宜しいと云ふまで待つて居つて、その命が下ると共にいきんで、小兒を産出すやうにしなければなりません。

(七) 産兒に對する處置の仕方

産兒は産み出さるれば、直ちに柔かな別々の布で、注意して目と口とを拭つて暖かなタオルで包んで、寒氣に冒されないやうにし、且つ母體の股又は蒲團等にて壓されないやうに注意しなければなりません。この産出期が済みましてから、約十五分を經過して臍帯の搏動が止んだ時が、母體との連絡を断ちても、差支へないと云ふ徴候でありますから、此の時臍帯を切斷します。臍帯を切りますには、小兒の腹壁より約一寸五分程隔りたる處を繫絲にて堅く結紮し、又之より一寸程隔りたる處を同じ様に結紮して、その間を消毒した鉄で切斷するのであります。斯う云ふ風にしましてから、産兒を母の股の中から取り出しまして、鹽の中に入れて産湯を使はせるのであります。が、この湯の温度は、攝氏三十六度位としまして、一は目、一は口を洗ひまして、次

に顔と頭、それから胴と四肢とに及びます。この産湯が終りますれば、タオルで産兒を取り上げて、能く乾かして後に、産兒の眼は硝酸銀水を點眼しますので、これは産兒が産道を通過する時或は病毒が眼に入りしやの虞があるからであります。これ等のことが、悉く済みますれば、産兒には柔軟な衣服を着させ、臍帯を施して、安眠せしむる方法を取ります。

(八) 後産に對する心得

それで、臍帯を切斷した後の母體は、大抵三十分以内に胎盤が自然に剝離して娩出するが常であります。この胎盤の娩出が終りますまでは産婦の容姿に注意せねばなりません。この後産期に當りまして、異状出血を起して危険を醸すことがあります。若しこの際に出血が多くありますれば、直ちに産科醫を招いて、相當の處置を取らね

ばなりません。而して娩出しました胎盤は、納器に納めて、産婦の褥を取り換へ、局部は消毒液で消毒しまして、その上に消毒綿を多量に重ねて丁字帯を施し、次に腹帯等總ての手當を行ひまして後、産婦を靜かに安眠させるのであります。これで全く分娩のことが終ります。

産褥中は如何にすべきか

(一) 産褥の日數

妊娠及び分娩に依つて起りたる身體の變化並に分娩時に被りたる産道の損傷等は、分娩の經過に異状のない限りは、普通六週間で妊娠前の状態に復します。この期間を産褥と云ひます。けれども、この期間は、平素身體の健全並に産褥中の衛生の如何

に依つて、六週間より長いことあり、或は短いことがあります。

(二) 子宮収縮と後陣痛

産褥の第一日には、分娩時に於けるやうに下腹部に間歇性の疼痛を覚えます。之を後陣痛と申します。この後陣痛は、妊娠の爲めに肥厚し居りたる子宮を故態に復せんが爲めに、収縮を來すものでありまして、この爲めに疼痛を發するのであります。故にこの後陣痛は、人に依り分娩後三四日間持續することがあります。假ひ後陣痛を覺えぬ人がありますけれども、子宮の収縮は、次第に行はれるものでありまして、分娩後十二日頃迄は、下腹の最下部に子宮底が觸るゝものでありますが、それ以後には次第に収縮して觸れないやうになります。

(三) 悪露と産褥熱の注意

産褥期中には、一種特異の臭氣を發する液を子宮より泄すものでありまして、之を悪露と申します。この悪露は、分娩三四日間は、血液やうの色であります。次第に淡くなり、七八日を経過しますと、白色の粘液となり、而もその量は、日々に減つて凡そ十二三日も経ちますと、全く止んで仕舞ひます。けれども、子宮の元通りになることが遅れると、猶之より長引くことがあります。又産褥を離れることが早過ぎると一時止んだ悪露も、更に血液やうの液を泄すことがあります。若し悪露に變つた臭みがあつた時には、産褥熱を起したのかも分りませんから、速に醫師の診察を乞はねばなりません。産褥熱とは、分娩及び産褥時に於て消毒不十分なりし爲め、一種の微菌が侵入して發します。最も危険な病症であります。

(四) 發熱と便通の注意

通常産褥中は熱を發生するものではありません。稀に發熱することがありますけれども、攝氏の一度を超える程は出ません。故に體温三十八度以上に昇る時は、産褥熱の疑ひがありますから、速に醫師の診察を乞はねばなりません。又産褥中は、呼吸及び脈搏が緩くなり、發汗し易く、稀には悪寒を來すことがあります。尿なども思ふやうに出す、大便も分娩後第三日迄は大抵通じないものであります。

(五) 授乳に就ての注意

乳房は産褥期の二日目より膨れて大きくなります、又硬くなつて、往々痛みを感じることがございます。初めて分泌する乳汁は、初乳と云ひ、凡そ三日間は普通の乳汁

とは成分を異にして居ります、けれども、敢て有毒のものではありません。寧ろ胎便を促すの効用がありますから、分娩後三日目より母乳を授くるをよしとします。通常乳汁の分泌するは、一ケ年内外であつて、その間は多く月經の閉止するを常とします。一ケ年以後となつても、授乳を繼續する時は、乳汁が分泌するものでありますが、この期に於ける乳汁の成分は、小兒に取つて餘り爲めになりません。乳を授けませんと乳汁の分泌は自然止つて、乳房が弛んで仕舞ひます。

(六) 産褥中は静臥せよ

産褥期中の二週間は、褥中に静臥することが最も肝要であります。假ひ兩便であっても、起き出ないやうにし、褥中で便器を用ひるやうにするのが宜しいのであります。産褥期は、子宮の常態に復するに要する時期でありますから、この間に於て、猥りに

早く起き出で、又は劇しい運動をいたしますと、子宮が位置を變へたり子宮が肥大したまゝ、收縮をせずして、種々子宮病の原因となり、危険なる出血を來し、又は一生不妊症に陥ることがあります。又假ひ二週日を経過し、産褥を離るゝに至りましても第六週日を過ぎ、子宮が全く復舊しない限りは、力を要する過劇の運動は決してなぬやうに注意せねばなりません。産褥期は情意の感動が過敏でありますから、凡て妊娠中等しく、勉めて家事を耳にせしめぬやうにし、大切にせねばなりません。

(七) 身體の清潔を保て

産褥中は入浴することが出来ませんから、毎日石鹼を用ひ、温湯を以て全身を拭ひ清めねばなりません。而して蒲團、敷布、寢衣等は、清潔にして乾燥したるものを用ひねばなりません。發汗したる時は、その都度乾燥したるタオルを以て之を拭ひ、寢

衣を取り換へねばなりません。但しこの際、室内の温度を適度ならしめ、感冒に罹らぬやうに注意せねばなりません。

乳房は常に清潔にして、温度を保たねばなりません。哺乳の前には清水に浸した布片を以て、拭ひ清めるのが宜しいのであります。さうしないと炎症に陥り易いものであります。産褥中は腹部に綿を當て、フランネル又は晒布の幅の廣いもので、捲いて置くが宜しいのであります。

局部は前にも一寸述べましたが、五十倍の石炭酸、又は百倍のリゾール水を以て、毎日數回清拭することを怠つてはなりません。そして拂拭しましたら、殺菌せるガーズを局部に當て、その上に脱脂綿を重ね、丁字帶を以て、之を保たしたら宜しいのであります。産褥期は三日迄は便通がないものですが、別段手當てには及びません。この期を過ぎて尙排便がありません時は、瀉腸するか或は緩下劑を與へたら宜しいので

あります。又産後第一日に於て尿が閉止しましたら、カテーテルを用ひて導尿せねばなりません。

以上の處置は熟練を要しますから、事情の許す限り、産婆又は看護婦に任かした方が安全であります。已むを得ずして家族でする時には一人が之を擔任して、消毒と云ふ念慮を寸時も忘れてはなりません。

(八) 産室と食物に就て

産婦の室内は、閑靜なる處を選んで明くして空氣の流通良く温度を常に程好くせねばなりません。

産褥中の食物は、最も注意を要します。即ち第三日までは、粥汁、牛乳等の如き流動物のみを與へ、決して固形の食物を攝らしてはなりません。第四日より消化し易

い固形の食物を少量宛、一日數回に與ふるの方法を採らねばなりません。即ち先づ魚肉等を與へ、漸次鳥肉、牛肉等に移つたら宜しいでせう。野菜の類では胡蘿蔔等より初めたら宜いでせう。即ち消化の良いものから初めるのであります。

産兒は如何に取扱ふべきか

(一) 嬰兒の寢床に就ての注意

嬰兒が、母親の胎内を離れて、世に生れました時には、前申します通り、先づ臍帯の結紮を致しますのですが、この邊は産婆に一任し、さて産湯を使はせまして、寢かせます。その寢床は母親の寢床と別に致した方が宜しいのでございます。而して其の暖さは、大人の夜具より、一層暖かにせねばなりません。それは、今迄母親の暖

い身體の中にあつた者が、一時に急激の變化を來しますから、餘程注意せねばなりません。秋から春までの氣候なれば、湯婆を入れて置きます。夏ならば、湯婆の要はございませんが、矢張大人よりは暖くせねばなりません。即ち通常薄い布圍二枚を掛けます。而して嬰兒は能く眠かす必要がございます。

(二) まくりは害あり

嬰兒には、生れて一晝夜と云ふものは、何も與へなくて宜しいのであります。昔はまくりを與へて居りましたが、まくりは、嬰兒の身體に、害はあつても、効力はないのでございます。生れて一晝夜と云ふものは、唯胎便又は尿を二三回も致すのが普通であります。

(三) 襁褓の取り換へ方

嬰兒には、肛門より陰部に掛けて櫻紙を充て、置きます。襁褓は洗ひ晒した晒木綿の片で宜しうございます。白い浴衣の古いのを、能く洗ひ能く消毒して用ひたらば良いでせう。胎便でもしますと、微温湯で絞つて、肛門から周圍を能く拭かなければなりません。若し出産後二十四時間内に胎便も尿もしないのは、鎖肛と云つて、肛門の穴が閉鎖されて居るのでありますから、切開手術を施さねばなりません。

(四) 牛乳を與へるに就ての注意

それから出産後二十四時間を経ますと、自と食欲を感じます。この時は未だ母乳の分泌が始まりませんから、牛乳を與へて置くのであります。牛乳の淡め方は牛乳一に

水三の割合、即ち牛乳を四倍にするのであります。それを沸騰させて、僅少な砂糖を加へ、ガーゼの乳呑を拵へ、小さい盃に一杯位づゝ、二時半毎に與へます。牛乳のことは詳しく別に述べます。

(五) 授乳上の注意

分娩後、四十八時間も経らなると、母乳の分泌がありますから、能く乳の周圍を石鹼で洗ひ、更に硼酸水で洗ひまして、嬰兒に飲ませます。尚こゝに注意せねばならぬのは、母の乳頭が出て居なくて、嬰兒が吸ひつくことが出来なことがありますから母たる人は、妊娠中乳頭を擽んで引張り出すやうに、よく馴らして置くが宜しいのであります。

(六) 母乳の出し方

又初産の時は、乳腺の分泌が初めて起るのでありますから、外部に出ないで、大變固くなる場合がございます。この時は、布片を暖いお湯に浸して、胸のあたりより乳頭に掛けて、そろりと撫で下げるのであります。斯う致しますれば、段々とするやうになります。

(七) 嬰兒の口を清潔にせよ

嬰兒に乳を呑ませる時には、嬰兒の口の中をも拭ねばなりません。矢張硼酸水（冷水）をガーゼに浸したもので、拭くのであります。又乳を呑ました後でも、同様にして拭きぬぐふのであります。さういたしませんと驚口瘡などを起し、又口内の不潔よ

り腸胃を害することがあります。

嬰兒に乳を與へる

(一) 嬰兒の胃と腸に就て

嬰兒の胃腸は、大人とは大層異つて居りますから、この點に注意しませんと種々の病氣を醸すものであります。何故と云ふに、嬰兒の食道から胃に移る所の筋肉は、至つて薄弱なるが上に、その路條は眞直になつて居ります。又生れたての嬰兒の胃壁には襞が多くして、知覺が過敏になつて居るのであります。この點からして、嬰兒は動もすると嘔吐し易く、胃腸を痛め易いのであります。即ち一寸抱き具合が悪かつたり身體をゆすぶつたりすると、嘔吐を催しますのは、この理に基づくのであります。又

その温度が冷めたかつたり、又は少し熱があつたりすると、腸にも胃にも激しき感にを與へます。これが大人でありますと、食道から胃に至る筋肉も強く、腸の筋肉も強いのですから、少し位不消化物を喰へましても、嬰兒のやうに中るものではありませぬ。又少々多量であつても、運動さへすれば宜しいと云ふこともございますし、嬰兒の胃腸とは、大なる相違があります。これを區別しないで、嬰兒の胃腸と大人の胃腸とは唯小さいと大きいだけであると思つて居りましたは、大なる間違であります。嬰兒の胃を損ねるのは多くこの誤解より生ずるのであります。

(二) 嬰兒と母乳

嬰兒の食物は云ふまでもなく、母乳が最も宜しいのであります。母乳の嬰兒の爲めに宜しいと云ふのは、已に學理及び統計の示す所によつて、明瞭であります。今こ

れを一言しましたならば、嬰兒は、母の分身にして、母乳も又母の分泌物であるからであります。嬰兒は已に胎内十ヶ月の間、母より營養を取つて成長しましたものでありますから、一旦身二つになりましてからも、この習慣を持続すると云ふことは、天理に叶うて居るのであります。従來の經驗により、母乳で育てる小兒は、天死も少し、その他種々なる利益があります。以上は主として小兒側の利益であります。母乳を吞ませることは常に小兒ばかりの利益でない、飲ませる母方の利益になります。小兒に乳を飲ませることは、母體に取つて非常なる利益があるのであります。何故と云ふと母親の子宮は、生み月になると平素の五倍になるものであります。この擴大せる子宮が分娩と共に少しづつ、收縮し、約七十日を経過しますと全く收縮して平常の状態に復るのですが、若し母にして乳を飲ませなかつたならば、子宮が容易に收縮しないものであります。従て子宮病を起し易いのであります。人間の身體は恰度都合よく

出來て居るものであります。又母乳の中には傳染病を豫防する分子がありますので母乳を飲む嬰兒には、彼のチブスの如き、猩紅熱の如き、傳染病に罹ることが少いのであります。

(三) 母乳を與へて不可なる時

このやうに母乳は、最も嬰兒に宜しいのですが、若し不幸にして母乳の量が少い時には已むを得ず、乳母を雇ひ入れ、又は牛乳などを飲ませるのであります。その全然母乳を飲まして悪いと云ふ場合は、言ふ迄もなく、母乳の質の悪い場合に限るのであります。即ち乳頭が裂けたり腫れたりした時、所謂乳目の出來た時は與へてはなりません。又母體が結核病、癩病癩癩その他神經病等を持つて居る場合、又梅毒、皮膚病脚氣、傳染病などに罹つて居る時には、乳を與へてはいけません。殊に脚氣は産後に

多いのですが、少々の脚氣位は障碍はあるまいと云つて、嬰兒に乳を飲ませる方があります。それは最も恐ろしいことであります。一寸注意して置きます。

又健康の人であつても、已に妊娠した時には、乳の成分が非常に悪くなりますから、妊娠すると直ぐ與へてはなりません。又母が凡そ四十歳以上になりましたは、乳に營養分が乏しくなりますから、與へない方が宜しいのであります。

(四) 母乳を與へる時間

母乳を與へる時間は、分娩後四十八時間を経過しますと一應醫師に母乳の検査をして貰ひ、果して與ふるも差支へがないとならば、これを與へることとし、最初の間は晝間は二時間毎に一回、夜間は三時間毎に一回、都合十回、一晝夜の間と與へます。而してその與へる時間は十分乃至十五分間を宜しとします。それから分娩後二週間経

ちますと、晝は二時間毎に與へ、一ヶ月後になりますと、晝は三時間毎に與へます。このやうに乳を與へる時間を、キチンと規律を立て、置きますのであります。たゞ泣いたからと云つて、與へてはいけません。又嬰兒が、豆腐のやうな固つた乳を吐いたり、又大便の色が悪かつたり、又秘結したりしました時には、早速醫師の診察を受けて癒さねばなりません。

(五) 母親が病氣に罹つた時

母たる人が病氣に罹つて服藥する場合には乳を與へることはいけません。その病氣が大したものでも、母は服藥の爲めにその乳を飲む小兒に毒を傳へることがありますから、賣藥などを飲む事は一切禁じなければなりません。そして服藥の場合には、一應醫師に相談したら可いでせう。

又母の精神感動と、その乳の分量及び成分とは、非常なる關係があります。即ち母が非常に驚くとか、怒るとか、怖るとか、憂ふるとか、兎に角、激しい感動のある時には、その乳は少くして又悪いのであります。よく世間には小兒の病氣を看護しつゝ乳を與へると、母がその病氣を非常に心配する爲めに、乳の成分を悪くし、之を飲む小兒の病勢益々募るにより、母又心配を加へて、乳の成分を一層悪くし、之を飲む小兒は、尙一層病氣を重くすると云ふやうに、相俟つて小兒の病氣を重くし、危篤に陥らすことが往々あります。注意を加へねばならぬ所であります。

(六) 授乳時の母の食物

産褥中の母の食物は、略前に申しましたが、乳を飲ます母の食物は、何が宜いかと云へば、母は自分と小兒と二人の食物を要するのでありますから、この間に於て自

然と食物の分量も多くなるのであります。餘り多いと腸胃を害しますから、成るべく分量を少くし、肉類とか、牛乳、鶏卵とか云ふやうな滋養物を喰べるやうにせねばなりません。即ち良い物を少し喰べると云ふ方針を取つた方が宜いでせう。又母は夜間乳を與る所からして、動もすれば睡眠不足を生じ、従つて身體を衰弱させ病氣を惹起し、育兒上由々しきことになりすから、衛生上から云へば、母たる人は夜はなるべく早く眠ると云ふやうにせねばなりません。又母たる人は身體を清潔にすることも大切であると云ふことを忘れてはなりません。

(七) 乳母の乳に就て

母乳を與へますことが出来ませんければ、已むを得ず乳母を雇はなければなりません。この乳母の選擇に就いては、大に注意を拂はねばなりません。

乳母の體質やらその乳の成分などのことは、何うしても、小兒科の醫師に検査して貰はねばならぬのでありますが、次に素人として相當の注意を拂はねばならぬことに就て述べます。

乳母を雇ふ時の注意

(一) 乳母の年齢

乳母を雇ひ入れるに就て世間の方は餘り注意を拂つて居らぬやうであります。これは甚だ間違つて居ります。それで先づ大體の注意を述べませう。

第一、母親と乳母との年齢が餘り懸隔があつてはなりません。最も多い懸隔としては一二歳、成るべくは同年がよろしいのであります。

(二) 乳母の分娩時

次にその分娩の時間が母親と同じのが最もよいのであります。假令その分娩の時間が、母親と同じからざる者を雇ふにしましても、その差違が二ヶ月以上のものは宜しくありません。例へば母親が三月に分娩いたしましたとすれば、乳母の分娩も、それと同月であるか、或は一月或は五月までに分娩いたしましたものでなければなりません。これよりは前後何れにても良くありません。何故かと申しますに、母乳は小兒が發育しますに伴つて、それに適當する様に、その成分に變化を來すもので、小兒が生れた當時はその弱い腸胃でも消化し得る稀薄いものであります。それが漸次に幾分濃厚になりまして、小兒發育に適應するやうに、種々に變化するのであります。それですから今日生れた小兒に、半年も前に分娩した乳母の乳を與へますれば、小兒はその乳を消

化することが出来ませんので、果ては便通が不良になり、又嘔吐するやうになります。これに反して、今年一月生れた、例へば生後七ヶ月の小児に分娩後二ヶ月も経過しない乳母の乳を與へますれば、消化には差支へありませんけれども、營養分が不十分で従つて小児の發育に不適當で、遂には衰弱の徴候が現れてまゐります。

(三) 乳母の系統と遺傳

それから、乳母の選擇に最も困難でありますことは、その系統の遺傳であります。その中にも最も注意しなければならぬのは、肺病、癩病、精神病患者の系統を引けるものであります。これ等の疑ひある者は、斷じて乳母として雇うてはなりません。又現在の病氣では、梅毒の徴候ある者は、これを避けねばなりません。若し此等を乳母として抱へ、その乳を吞ますと、多くその小児は發育いたしません。假ひ發育し

ても、腦病を起し易く、遂には、これが爲めに斃れることがあります。

又脚氣を患つて居ります婦人の乳は、小児に取りまして有害であります。脚氣患者の乳には、中毒する成分がありまして、之れが爲めに小児は、便秘嘔吐を催したり、或は心臟病を起したりして、終には腦症を起させるのであります。次には心臟病のある婦人です。その症候は素人には分りませんが、これ等疾病のある者の乳は、大に小児の發育を妨ぐるものでありますから、亦注意せねばなりません。

(四) 乳母の乳汁

乳母の選擇に就きましては、その年齢や分娩期又はその系統などの識別は素人でも出来ますこと、それに恰好の者を選んで雇ふべきこととありますが、猶その體格や乳汁の成分に就いては、その道の醫師の精査を経るが肝要であります。

この他猶最も注意を要しますのは、その乳母たるべき者の性質であります。兎に角、母親の代理として、その小兒を養育するものでありますればその性質の如何を知ると云ふことの必要なことは、別に申し上げるまでもないことでありませう。

嬰兒に與へる牛乳

(一) 牛乳の効能

何かの事情に依りて、適當な乳母を得ることが出来ない時には、止むを得ず人工營養品を取らねばなりません。その人工營養品の中で、割合に人乳に似て居りますのは牛乳を第一の營養品として用ひるのが、最も宜しいのであります。併しこの牛乳と云ふものは、人乳に比べまして、その成分も劣つて居りますし、又加ふるに便宜も悪い

ものであります。今その劣つて居る所を擧げて見ませう。

第一牛乳は人乳に比べて消化し悪いものであります。これについては、種々の人工的の補をなさなければなりません。

次に牛乳は腐敗し易いものであります。この牛乳を詳しく調べ、顯微鏡の下で見ますれば、有害な微菌その他の有機物が無數に混じて居ります。これ等は皆病氣を惹き起す原因となります。それですから牛乳を用ひますには、その殺菌法や消毒法に重きを置かねばなりません。

(二) 牛乳に對する注意

そこで、この微菌は何うして何處から牛乳に入りますかと云ふに、牛の體軀の周囲の毛に不潔物が附いて居つて、それが空中に舞ひ出で、牛乳を取る搾取場の空氣の

中に混合して居つて、それから牛乳の中に入りますか、又はこれを搾取する者の手或は衣服に附着して居る微菌が、自然に入るのではありません。この他、搾取人の咳、嘔或は痰、鼻液の一部が、何うかして入りますことがあります。この場合には往々結核性の微菌が入り込むこともあります。

尤も近頃は、衛生警察が行き届いて居りますから、前申したやうなことも少く、牛乳屋でも消毒に就ては、相當の設備がありましたしても、尙搾取器の消毒が不充分であつて、それが爲め有害微菌の入る事が往々あるのでございます。又假ひこれが消毒は完全に行はれましたも、その販賣取次人が不正の商人で、牛乳の中に水を入れたり、しろ水を混合したりすることもあります。又最も嚴禁されて居ることではありますが、尙奸商によりますと、病牛の乳を發賣することがあります。こんなことでありますから假ひ、牛乳屋の方で殺菌消毒のことがあるにしても、十分の信用が出来ません。何う

しても家庭で、これを行はなければならぬ必要があります。

普通世間でも、牛乳は腐敗し易いと云ふことは知つて居つて、能くその腐敗するまでは、どの位時間の経過のあるものかなどと、疑問があるのですが、そんな時間の経過が何うの斯うのと云ふことを家庭では知る必要はありません。家庭では牛乳と云ふものは、直ちに腐敗すると云ふ觀念を持つて居られますれば、それでよいのであります。若し腐敗しました牛乳を小兒に飲ますと、その小兒は直ちに腸胃に疾病を起して下痢をいたします。

(三) 消毒、防腐、殺菌

そこで家庭に於ける牛乳の防腐殺菌は、種々の方法があります。併し大別すれば低温殺菌、煮沸殺菌の二種であります。而してその殺菌された牛乳で消化し易いのは、

低温法を用ひたのでありますけれども、その方法は非常に面倒なもので、一寸容易く出来るると云ふ譯に参りません。それですから煮沸します方が多く行はれて又便利なものであります。この煮沸殺菌器には、種々のものがありますが、今その中で最も輕便なるものについて、その使用法をお話しいたしませう。

この器の構造は、鐵葉の板に穴が明いて居つて、これに六箇位の罎が立てられ得るやうになつて居り、罎の口には護謨栓があつて、これを鐵葉の罎に入れ堅く密閉して瓦斯なり石油なり、炭なりの上で蒸すのであります。こゝに注意せねばならぬことはその罎に牛乳を入れますに、その量を小兒の飲む一回の量に等しくして置くことでありませう。若しこれより以上多く入れますと、一旦罎の口を開けますと、空中の微菌が入らぬとも限りませぬ。折角殺菌したのも、その甲斐がなくなつて仕舞ひます。そしてこの蒸して殺菌します時間は、二十分も費せば十分であります。さて斯う云ふ風

に殺菌しましたものを、そのまゝ取出し、先づ第一に微温湯に入れ、それから水に浸してその水を三四回取り更へて元の入れたまゝにし、蓋をして、冷蔵庫のある家庭なら、その冷蔵庫へ、若しこれがなければ、流下か何か冷かな所に置くのであります。一體蒸して殺菌したものは、自然を待つて冷やすのが、牛乳の味は宜いのですが、前のやうにしますと、栓の護謨が堅く緊つて、罎を密閉しまして、微菌の入る隙をなくなして仕舞ひますから、味の方は少し劣りますが、殺菌消毒と云ふ上から云へば、この方が宜いのであります。それから斯うして置きますと、二十四時間位を保つことは大丈夫であります。即ち小兒一日の飲量は、十分にあるのであります。而してこの器械は、大抵の醫療器械舖にはありますもので、その價格も僅か三四圓のものでありますから、牛乳を使用する家庭では、これを用ひるのが宜いと思ひます。鐵瓶の湯で温めるとか、土鍋で煮て居る家庭がありますが、それでは十分の消毒殺菌が行はれるも

のではありません。又この殺菌したものを、冷水の中に浸して置くのを見受けること
があります。それはよくありません。矢張、乾燥した冷たい處に置いた方が宜しい
のであります。

(四) 容器の洗滌の仕方

容器の洗滌法は極めて必要であります。牛乳の消毒を嚴重にして完全に貯藏しまし
た處で、その牛乳を容れる器が不潔でありましたなら、何にもならぬのであります。
牛乳容器と申せば、三つから出来て居ります。即ち乳頭と吸管と乳罎とであります。
この容器には、種々ありますが、外見や形はごうでも宜しいので、只必要な條件は、
洗つて清潔にし易いと云ふこととあります。決して複雑な構造なのは、お求めになら
ないのが宜しい。それでも乳罎を洗ふには刷毛と石鹼水とで能く洗ひ、清水で幾度も

清めるが宜しい。人に依つては砂や豆などを入れて能く振つて洗ふのもありますが、
それも中々簡便で、よく垢が落ちます。斯様に洗ふた後は、臺の上に逆にして乾か
すのであります。殊に注意を要しますのは、乳頭と、護謨管であります。これは掃除
も仕悪いし、又等閑にもし易いものであります。これは用ふる前に、必ず清水を一二
度通過して、それから牛乳の罎に入れるが宜しい。而して一度用ひたならば、假ひ牛
乳は残つて居るにしても、この乳頭と護謨管は、必ず取り除いて、清水の中に入れて
置いて洗ふが宜しい。決してその儘にして置いて再び用ひてはなりません。牛乳の温
度は大抵人乳と同じ温度に温めて飲ますが宜しい。その温度は攝氏の三十五度位であ
ります。以上の諸項は必要な事でありませうから、之を實行するには、可成母又は養育
者が自身にするのが宜いのであります。無教育無責任の下婢等に任しては到底十分な
事は出来ません。

(五) 嬰兒に與へる牛乳の淡め方

牛乳は人乳と違ひ嬰兒に吞ますときは、生後六ヶ月位までは、淡めて用ひねばなりません。何故淡めねばならぬかと云ふに、牛乳は人乳よりも、その成分が消化しにくい故であります。素人考へて云ふやうに、その主成分たる蛋白質が倍あるから、二倍にする云ふ様な簡単なことではありません。例へば人乳は小兒の生れたて一二ヶ月の間は、非常に濃くて、段々月が重なるに従つて、小兒は成長するに係らず、乳の方は却つて濃くなつて行く。夫故一年以上も経つた人の乳汁は、半分は水の様になります。けれども生れ立ての小兒に母の乳汁を淡くして吞ます人はありません。然るに牛乳を吞ますには、淡め方に一定の標準がありました、その小兒の成長するに従ひ、又その小兒の體質に従ひまして、その淡め方も次第に更へて行かねばなりません。その

淡め方はどうしたらよいかと云ふに、専門の醫師に診察を受けてそれからその淡め方を確めて貰ふが最もよいのであります。一定の標準はあるものゝ、その小兒の體質と消化の工合により、斟酌をせねばなりませんから、何の小兒にもこの標準を守る事は出来ません。只参考迄に弘田博士の兒科必携に記載してある稀釋法を擧げますと、

年 齡	牛 乳	水
初 三 週 間	—	三
四 一 八 週	—	二
三 一 五 月	—	一
六 一 七 月	二	一

以上の割合であります。

その他、この稀釋法に就きましては、専門學者の間に種々なる説がありまして、或

人は比較的濃い稀釋法を稱揚して居るものもありますが、幾通りも挙げますと、却つて迷ひますから略して置きます。牛乳を淡めるに蒸麥汁などを用ひる事に就て雜誌等に色々擧げてありますが、餘り奨める譯には行きません。

(六) 嬰兒に與へる牛乳の分量

これも亦、前に申しました淡め方と同じであつて、一定して居りません。随分詳しく書いてあるものもありますが、主に嬰兒の體質と消化の様態により、斟酌せねばなりませんから、細く定規に當てることよりは、寧ろ大體の範圍に於て、加減をして用ひる方が弊害が少いから大體の事だけを述べます。

- 一ケ月迄 三〇、〇乃至 六〇、〇瓦
- 二ケ月より四ケ月迄 六〇、〇乃至一〇〇、〇瓦

五ケ月より八ケ月迄 一〇〇、〇乃至二〇〇、〇瓦
以上の量は牛乳と水と混合した量であります。この量の範圍で取捨するのであります。

如何に發育の良い小兒でも二〇〇、〇(一合)瓦以上は吞ませぬが宜しいのであります。

(七) 母乳と牛乳の併用

人乳で育てると同時に、牛乳を吞ませる方法は、非常に都合が好くて、そして結果も亦良い營養法であります。例へば一日に八回哺乳せしむるものとすれば、その中の一回、又は二回は牛乳を吞みますのであります。斯う云ふ風に癖をつけて置きますと、母や或は乳母に病氣の起つた時、或はその他故障が出来て授乳を中止せねばならぬ時

には、非常に都合が宜しい。通常は朝夕二回牛乳を吞ませ、その他は人乳を與ふるの
てあります。

(八) ミルクの飲ませ方

乳母を雇ふことも出来ず、尙僻遠の地方であるとか、又は經濟上の事情より牛乳を
得られない時に、何うしたらよいかと云ふに、その時には仕方がありません、煉乳即
ちコンデンスミルクを小兒に飲用させるのであります。併し煉乳は生乳に比べますと
極く滋養分が少く、且つ一層腐敗し易いものであります。一旦罐の蓋を明けますれば
夏季なら三日、冬季でも一週間、それより以上は保たないものであります。實を申し
ますと、煉乳は餘り小兒に適當したものではありません。出来るだけ、これを用ひな
い方が宜しいのであります。唯、前のやうな事情がある時は仕方なしに用ひるもので

あります。どうかすると世間では、牛乳より煉乳の方が勝つて居ると云ふやうな考へ
を持つて居るやうですが、それは間違つて居ります。それから非常に濃厚な煉乳を實
際小兒に飲ませますには、どんなに淡めたら宜いかと云ふに、それは牛乳と同じく、
小兒の體質と、發育とに由つて加減しなければなりません。併し先づ一般の標準を申
しますれば生後初の一週間は煉乳一、白湯二二、二週間より二ヶ月の終りまでは、煉
乳一、白湯二一、三ヶ月より五ヶ月の終りまでは、煉乳一、白湯二〇乃至一八、六ヶ
月から八ヶ月の終りまでは煉乳一、白湯一七乃至一五、九ヶ月以後は煉乳一、白湯一
四乃至一二と云ふ割合に致すのであります。

尙これに就て注意せねばならぬことは、一匙と申しても山盛もあれば、輕目のこと
がありまして、匙加減があります、すれきりにするのが可いのであります。併し成
るべくはメートルグラスで計りたいものであります。それで其の温度は牛乳と同じく

微温即ち三十五度、又その小兒に飲用させる度数も、牛乳の時と同じにすれば宜しいのであります。一體煉乳の溶解しましたものは、極めて腐敗に傾き易いものでありますから、小兒が一回分でも残しましたなら、それは直ちに捨て、仕舞はなければなりません。決してこれを後に用ひると云ふことなどをしてはなりません。それからこの煉乳はそれを求める處に依つて等差があります。それでありますから、これを小兒に飲用させる前には、是非醫師の検査を仰ぐ必要があります。現今主に使用せられて居るものでは、鷲印が一番よい様に思はれます。而してこの煉乳の罐の蓋を明けまする時に異様の臭氣のありますや、又舌の上に乗せて見て、ざら／＼するものが残る様なものは悪性のものとして斥けねばなりません。

(九) 其他の乳汁

その他日本には、昔から乳粉と云ふものが行はれますが、それは極めて滋養分の少い、殊に消化の悪いもので、生後十ヶ月以前の小兒には至つて不適當のものであります。經濟の許す限りは、斷じて用ひないやうにしなければなりません。併し生後八ヶ月後の小兒には、牛乳に混合して用ひても、左程の差支へはありません。尙山羊の乳のことを申し添へます。山羊の乳は滋養分に富み消化もよく、牛乳に比して優劣はありませんのみならず、場合によると牛乳よりは優れることがあります。醫師の側から申しますと、牛乳よりは、この山羊の方を取りたいのであります。日本では、この山羊の飼養が少く、従つてその乳汁と云ふものも、餘り澤山は出来ず、市場に上つて販賣することも、牛乳のやうに多くなく、その價も廉くありませんから、強ひて牛乳に代用させる必要もありません。

結婚生活には婦人の自覚が大切

(一) 離婚の多い原因

歐羅巴人は、日本を離婚國だと云つて居ります。實際日本位離婚の多い國はない、以前は、全然父母の意思に因つて結婚したのでありますから、自然離婚が多いとせねばなりません。併し近頃では、自ら此の傾向が薄らいて來ました。未だ容易に歐羅巴のやうに、本人自ら眞に相手方を見抜いて、結婚する程には至りませんが、餘程本人の意思、本人同士の調和相愛に重きを置くやうになりました。それなのに、今日却つて以前にも増して、離婚の多くなりましたのは何故でありませうか、それは以前とは違つて、女の自意識が強くなつた、言ひ換へれば、女が醒めたからであります。又生

活の襲撃、舅姑との間に於ける新舊思想の衝突の劇しいのにも原因して居りませうが私は思ふに、日本に離婚の益々多くなるのは、此の如く餘儀なき時代の推移に原因するよりか、もつと有力なる原因があるからではないでせうか。

(二) 離婚と自我の局小

離婚の有力なる一原因とは、何であるか、それは前述のものゝ外に、今日の婦人は古い時代の婦人と違つて、所謂修養の浅い身の上を開放されたる結果、自我その者を小く用ひるからであらうと思ひます。大なるべき自我をも、至つて小にして而も急激に之を發展させやうとするからであります。で籠を出て、未だ飛ぶ修練の浅い女性には、この理の分らぬのが少くないからであります。自我が、我が肉體に限るのは野蠻未開の人民であります。それを家族と云ふ團體を以て、自我とするのは、較々進ん

だもので、支那日本の昔、西洋でも昔には多くはさうでありました。所謂孝女節婦は此の類なのであります。それから一層自我を擴大して、進んで國家大となるに至つても、孝女烈婦を生ずる所以で、東西の近世に、此の例が多い。それが進んで全く世界的となれば、最も進んだ自我で、此處まで來なければならぬと思ひます。

(三) 本當の自我を持たぬ女は哀れ

所が今日の女性は、自覺しても、眞の大なる自我を覺らないで、最も小なる幼稚なる肉體そのものを自我の正體とし、自家の本能を満足し、自身の都合を計らぬものは、努めて排斥しやうとして居ります。それも過去に屬した自覺しない自我を擴大しやうとする、換言すれば小我に比すれば盲従、即ち盲目的犠牲も喜ばしいことではないが、さりとして肉體的に自我を取扱ふに至つても、到底、人と和合することが出來ず、夫に

嫁すれば夫と反撥し、舅姑同居すれば舅姑と反撥し、小舅、小姑に接すれば、小舅小姑に反撥するのであつて、離縁の多いのもこゝにあると思ひます。そんなこととて、どうして人生が面白く、有意味に渡つて行けませう。

(四) 進歩せる倫理學に依れ

それでありますから、私共は、今日の女性は、必らずしも儒教的の服従の精神、武士道的の犠牲の精神を發揮すべく、和漢の書物を漁り給へとは云ひませんが、今日の最も進歩したる倫理學でも研究するか、又は社會の實地に當つて、今少し自我を擴大し、一身より一家の幸福を思ひ、一地方、一國家、ひいては世界人類の福祉を念頭に置いて、徐ろに自家の計を立て給へと云ひたいのであります。

若し此の見地に立つて行つたならば、夫婦の和合も、舅姑、小舅、小姑との和合も

何もない、何れも自我の小部分と見て活用して行くから、うまく行くものと思ひます。女権の擴張運動も最早徹の生えた程古いが、男性を敵としないで自家薬籠のものとして母となり、家庭教師となり、婦となり、妹となり、娘となつた氣で終生の目的を達すべく、抑揚頓挫、虚々實々、極めて眞面目に、親切に、赤心で、周囲の人を美化しては如何であるか、さすれば男性は女性の前に頭が上るまいと思ひます。

(五) 自覺せぬ婦人の結婚は駄目

此の見地よりして、私は眞の自由結婚には不賛成でありませんが、己が肉體を自我として居るやうな淺薄な女性は、そんなことを云ふ資格はあるまいと思ひます。無論良人の選擇は本人の意思に依るべきであります。今日の大多數の女性に對しては之に先立ち、父母の眞面目なる干渉が大切なことと存じます。そうして離婚ほど、

女性に取つて不名譽不利益なことはありません。今日の一部の日本の娘や母はそれほどに思はないやうですが、今日の歐羅巴の婦人は、日本の昔の如く、否それ以上に正當な理由なき離婚を無上の恥とし、男子と雖も、矢鱈に離婚したるものは、社會に立ち難いと云ふ有様ださうであります。で私は日本の女性も今少し自覺の程度を高めて、犠牲の精神を起し、否自我の擴大發展を希ひて結婚生活を有効に無事に終らせたいと思ひます。思ふに、小なる自我を我れとして居るものこそ、大局、全體に眼が到らぬから、衝突、不満が多く、結局自我の破滅に了ることに至るのであります。尙私共醫師の立場から申すと、何事を見るにも、今少し衛生的にして、相互健康と云ふことにも重きを置いて頂きたいと思ひます。

離婚と男子の道德心

(一) 一人前の女

むかしの女は従順にして、良人又は尊屬に犠牲を拂はねばならぬことゝなつて居ました。舅姑に對し良人に對して、自己を犠牲にして仕へました。其處に婦人の貴い生命がありました。つまり自己を捨て其處に自己を見出すと云ふ消極的の生命である。然るに教育が進歩して今日では次第に自己中心と云ふ風になつて來ました。他の犠牲から自己中心に移つて來る處に容易ならぬ婦人問題が生じるわけであります。それであつて女子は自らの人格を認め、義務を負ふと同時に又權利をも主張しなければなりません。

自己を棄てた處に生命のあつたむかしの婦人から一轉して、自己を認めて自覺の感に入つた今日の婦人は、家庭に入つても社會に出ても、なか／＼に紛紜は絶えない事とせう。それでも心の奥にしつかりとした修養を積んで居ればいゝけれども、今日の婦人の宿弊として、物事が甚だ薄つべらで、唯口の先きで仕事をしやう、しやうとする様子なのが多い。一時を胡麻化しさへすればよいと云ふ有様で、物事に確信がないから、勇氣も出なければ智慧を揮つて紛紜を切り抜ける事が出來なくて、困難に陥るのが多いのである。

(二) 腹藝のある女

婦人が本統に自覺して社會と云ふものを知つたならば、何も物事に蹉跌はない筈であります。結婚するのは、初めて社會に於ける共同生活を營むのでありますから、

社會の一員としての義務を負ふわけで、處女時代のやうな、單純な又安易な生活を送ることは出来ません。それですから結婚を以て唯人生の樂事、一生の運を獲得しやうと考へて行くときは、自然不平や不満に陥るのは當然のことである。言ひ古びたことながら、世の中は苦樂相殺のもので、之を打開く方法は人格の完成に依るべきであります。自分一人と云ふ狭い自己を捨て、社會と共にすると云ふ廣い大なる自己とならねばなりません。大なるおのれを貫徹するには、小なるおのれを壓服せねばなりません。そうしてそれは克己忍耐、努力、勤勉、誠心、實意がなければなりません。一例を申しますと、日本の様な家庭制度の國では舅姑と同居することを普通とします。それがやゝもすると、舅姑と自己とは一致しない場合が甚だ多い。すると長上たる舅姑を屈する譯に參らぬから、自然自分の方から下手に出なければなりません。こゝに從順と美德とが必要となつて來ますが、此の際、舊思想の人に對しては、心なら

すも盲従の態度を執らねばならぬかも知れない。それが甚だ忍びない事であるけれども、自覺した上で盲従の態度を執るのでありますから、必ずしも自分の人格を辱めた譯ではありません。舅姑の命はそのまゝ遵奉して、次第に其の色彩を新らしくし、其の缺點を補ふやうにするのであります。勿論この場合多くは嫁が世事に對して無經驗と云ふ事は免れませぬから、この機會に之を改むべき所は澤山ありませう。及ばぬ所は長上の人に見習はねばなりません。舅姑の缺點に對しては之に同情して盲従の態度を執り、相談のやうにしつゝ次第に改良して行くと云ふ様にしたならば、父母に對し、良人に對し、又は舅姑に對しても同様であります。これには物事に頓着せぬ廣い度量と服従の美德と小事に屈伏せぬ勇氣と忍耐とが最も必要であります。されば現代の人は、むかしの人の様に唯感情の動くまゝに喜憂すると云ふ様な事もなく、よく意思を鍛鍊し、感情を陶冶すると云ふ必要があります。今日殊に婦人は情

に任せて事をするといふ缺點があります。これは意思の鍛錬、感情の陶冶が行はれて居ないからであります。故に平素からして物事を忍び、我慾に克ち喜怒哀樂を餘り色にあらはさない様でなくてはなりません。かう云ふと、人は何だか舊式な克己主義を鼓吹する様に思はれませうが、さうではありません。大なる自己の爲め小なる自己を制するのでありますから、結果は大なる愉快を齎す事になります。家庭も社會も國家人類もつまりは肉體我を大きくしたものと見るのは、今日の倫理學の説明する所でありませう。それには常識が必要で、女學校の教育と云ふのは、つまりこの常識の涵養と云ふ事に過ぎないのであります。

さて近來は離婚がなかく、多いやうであります。これは男子が矢張り舊思想に囚はれて妻を奴隷視したり、又は矢鱈に新らしがつて、動物的慾望を事とし、人を人とも思はぬ所に原由するのでありませうが、一つは前に述べたやうに、妻の方で結婚を人

生の快樂と思ふ誤解から出た不満足から起ることもありませう。又一つは男子を誤解した所からも起らうと思ひます。今日の男子は婦人の智能の進歩した時代にも尙むかしながらの無理を女性に強ひて怪まないと云ふことが多い。進歩した婦人、教育を受けた婦人は、これを甘んじて受けませうが、甘んぜねば不従順と云ふ事になりますから、心の奥には否みつゝもこれに服従しつゝ工夫をめぐらして、悪い事は次第に改めて行く様にしたいものです。悪事でも甘んぜねば不従順になるのですから、そこをよく心して行かねばなりません。

(三) 離婚は單純な女に多い

かうなれば女子の自覺は一層必要であると共に、單純な線を一直路に進まず、複雑な路を曲折して行かねばなりません。今も昔も同じ事で、離婚とか破鏡とか云ふ事の

表には必ずこの單純で直情である婦人の上に多いかと思ひます。日本の婦人は表情が下手なとも言はれて居りますが、これも程度場合に依ります。自分の氣に入らぬと言つて、直ぐに厭やな面をしたり、沈んだり、怒の表情をしたりしては、最愛の良人は勿論、雇人でも出入商人でも皆反感を起して了つて、結局一人ぼつちになつてしまはねばならぬのであります。

下層社會によく見る事ですが、一寸自分の感情に適はぬと、側に客が居らうが居まいが直ぐ呶鳴つたり、叱りつけたりして、結局何の得る處もなくして了ふことが多いやうです。何でも物事は、其の程度なり、位置なり、場合なりをよく考量して、適宜に云ひ、適當に行ひ、微細な點にも注意して事をまとめねばなりません。世間的の婦人の價値は全くこゝにあるのであります。それから又、今日の婦人の通弊とする處は自己の定見と云ふものがなくして、人の言葉や風流ばかりを氣にかけると云ふことで

あります。これは多く衣服や身の廻りの事について起る問題ですが、婦人は今少し見識を立て、自分の善いと信じたことは、誰れが何と云つても動かないと云ふだけの見識と勇氣とを持ちたいものであります。

子女平常の身嗜み

(一) 衛生上からも經濟上からも

私は餘程以前から下髪全廢論を主張して居る者であります。それは私の職業柄の衛生方面からと、又經濟方面等の見地から觀察して何うも宜しくないと思ふからであります。ところが之に對して、妙齡の娘に最も相應しい優美なお下げを、全廢せよなど、は以ての外な沒趣味な事を云ふ、と云つた様な反對論を耳にする事があります。

又私またわたくしがそれ程迄にお下げを反對はんたいするならば、それに替かへる事ことの出来る様やうな、凡またての方面ほうめんに叶かなつた理想的りきうてきのものを考かんがへたらよからうと云いふ事ことであります。結髪けつぱつの發明はつめいは私わたくしの専門外せんもんぐわいでありまして、いくらも新進しんしんの髪結かみむすさんがあるのですから、其方面そのほうめんは其方面ほうめんの方かた々た々におゆづりする事こととして、此處こゝには單たんに私わたくしとしての考かんがへを述のべて見みたいと思おもふのであります。

(二) 日本人と西洋人の髪かみの相違

一體たいい日本人ほんじんは自分の趣味しゆみと云いふものに對たいして自覺じかくがありません。何なんでも人ひとの眞似まねさへすれば好いいと思おもつて居をります。お下げは昔むかしから日本にほんの御殿女中ごてんぢゆうの風俗ふうぞくに成なつて居をります。それとは少々せうせう形式けいしきが違ちがひますが西洋せいやうからお下げが入はいつて來きました。それと同時に女をんなの洋装やうさうが一時いちじ非常ひじょうな勢いきほひで流行りやうかうしたものでした。此こゝの流行りやうかうとか輸入ゆいによとか申まをすもの

は、凡すべて上流社じやうりゅうしゃ會かいから始はじまります。その上流じやうりうが又盲目またまうもく的に前ぜん後ごも考かんがへずに眞似まねをするのであります。元來ぐわんらい西洋婦人せいやうふじんは頭髪とうはつ其そのものが裝飾さうじやくではなくして帽子ぼうしが飾かざりであります、だから頭髪とうはつが切れやうが其方そのほうの心配しんぱいは餘あまりないのであります。第一だい兩者りやうしやの髪かみの毛けを比くらべて見みますのに、外見ぐわいけんも實質じつしつも餘程よほど相違さうちして居をるのであります。西洋人せいやうじんの髪かみの毛けは輕かろくてふわ／＼して居をります。重おもさが無ないから下さげて居をても苦くるになりませんが、日本にほん人の毛けはかなり重おもいものです。且かつつ長ながいので起居たかみの場合ばあひに態度たいどを失うしなひます。常つねに大たい切きつな腦なうを後うしろから、頭髪とうはつの重おもさで引張ひっぱられて居をるのは大層たいそう宜よろしくない事ことであります。

(三) 衣服と頭髪

次に衣服いふくが違ちがひます。西洋人せいやうじんは毛織物けおりのものを着きて居をますから、相共あひともに切きれる憂うれはありませんし、汚よごれたのもブラシをかければ宜よろしいのであります。日本にほん人の衣服いふくは毛けに負

ける質の物のみで、重い毛で始終擦られてちぎりに切れてしまひます。そして垢はつき易くてブラシの効能もありませんから、美しいお嬢さん方の肩は毛の爲めに汚れて光つて居ります。これを常に清潔に保たうとしたならば、一週に一回着物を新調し、又其度に毛も洗はなければなりません。斯様にお下げと云ふものは不經濟であり、衛生にも宜しくなく、頭を重くして發達を妨ぐるものであります。小學校や女學校の二年位の、未だ毛の揃ひ切らない者は仕方がありませんから、お下げにするより他はないでせう。其頃はまだ油も要らないし短いから重さもありません。併し女學校三四年になつたならば、必ず束髪にする様な學校の規則でも設けて欲しいと思ひます。所が束髪では體操の時にピンが抜けて困るからお下げが好いと云ふ説があります。それは御尤もな事でありませう。そこで私は考へました、それは塵埃を被らない様に又ピンの飛び出ない様に、何か上から帽子の様な掩ふ物を拵へたら宜しからうと體操帽の工夫

は如何なものでせう。

(四) 髮形の改良

私共にしまでも髪を洗つて下げて居る暫しの間は、本を讀んでもしんみりしなかつたり人様と話をしても氣が落着きませんが、ちやんと結び上げるとさつぱりとした頭腦になります。これ程氣分に密接な關係があるものです。お下げは優美だとか可愛らしいとか、若く見えるとか、單におしゃれ關係からのみ割り出して、娘の發達を妨げる必要はなからうと存じます。小笠原流の御殿女中はそれでも宜しいでせう。けれども此の忙しい世の中に、殊に活潑であるべき女學生が、襷を一つ掛けるのにもそこら中へつりいばを拵へなければならなかつたり、雑巾を掛けるのにも右や左へ頭を振り廻はさなければならなかつたりするやうでは、何の働が出来ませう。私は往診

の途中車上から學校通ひの女學生を追ひ越して、脊中の部分が三角形に光つて居るのや、襟が切れかゝつて居るのを見る事があります。私は娘を持つて居る母親によく問ひます。「貴女の娘さんのお下げは不經濟ではありませんか」これに對して「それ處ではありません、もう汚れ易いし切れ易いし、どうしたらよい工夫が出るかと考へて居りますが、お友達の皆様がさうですから」と母の答は皆同じであります。私には女學校へ通つて居る姪が三人あります。私はいつも逢ふ度にこれで世話をやいて居りますが、ごうもなほりません。大きいなどは私の家へ来る時だけ、叔母さんに叱られるからと云つて、東髪にして来る有様です。現在私の處から通つて居るのは東髪のみであります。そして學校でも三四人そのお仲間が出来たと云ふ事ですが、それも餘程決斷力を費したらしいのであります。

(五) 頭髮と黴菌

頭髮程黴菌の付き易いものはありません。ですから毛程汚いものはないのであります。そのくせ毛程御飯や食べ物の中に入り易いものはありません。ですからほんとうを申しますと、臺所に働く人は、手拭の類でも被つて欲しいのであります。私共が大手術をする時お腹を割る場合などは、頭髮をきちんと消毒した布で結へて呼吸のかわらない様に、男子の方でしたら髭迄同様の布で被うてしまふのであります。それ程毛は傷に對して嚴重にしなければ醫者の本分にならないのであります。御注意を願ひたいものであります。

花嫁花婿の健康調査

(一) 財産よりも健康の調査

以前は日本人の通弊として其の子女をめあはせるには相手の財産とか家計とか身分とかを先にして調べてかゝつたものですが、近頃は多少その弊害が認められて、何より先づ本人が在學中の成績に重きを置き、それらを後廻しにするといふ傾きになつて参りました。これはまことに喜ばしいことで向後も斯くあらねばなりません、私はそのれより尙一步を進めて第一結婚する相手を選ぶのに其の本人の體質を確めることが最も必要かと思ひます。

如何に財産が山と積んでゐても、如何に容貌が美しくとも、又如何に學業が優れて

頭腦が明晰であつても肝心の身體が孱弱であつては、結婚しても到底幸福な日は送られません。稀には美しい衣裳を着けたり、芝居を見たり遊山に行つたりして慰められる場合もありませうが、それは一時の氣晴しで、常に碌々仕事も手に附かず、身の周圍のことも自由にならぬといふやうになれば夫婦お互の不幸であるばかりでなく、延いては家庭に不安な空氣を作り、それが序開きに悲劇の幕を演ずることになります。「不如歸」などは其の好適例でせう。あのヒロインの浪子は美人で、伶俐で、氣質の至つて優しく、學業の成績も勝れてゐたといふに不拘破鏡の歎を見たといふことは、要するに病身であつたからでせう。今の若い方々は浪子に同情されるやうですが、それは自然の結果で、道徳上からは是非する餘地がないかと思ひます。

(二) 聰明な子と結核質

結婚に先だつて本人の體質を確める必要のあることは、此の浪子の一挙に徴しても明かであります。

けれども人間の身體は單に表面から観ただけでは、果して健康であるかどうか又遺傳の有るか無きかは、その病勢が餘程進んでしまふなければ、容易に分かるものではないありません。それを周圍に迷惑をかけることなしに間違ひなく調ると云ふには、相手

が小さい時からかゝりつけの醫師に訊ねるのが一番手廻しが早うござります。『健全なる精神は健康なる身體に宿る』と申しますが、それが如何なる人如何なる場合に當嵌まると思ふのは早計で、身體の孱弱い人が勝れて伶俐で、學業の成績も秀でてゐるといふ例が澤山あります。

結婚する相手を選ぶには、此の點を確めませんと、後日取返しのかね羽目に陥りますから、餘程御注意なさらなければなりません。

總じて肺結核の素質ある腺病狀の方は、男女ともに頭腦が明晰で、記憶もよく、學校にあつては一二席位を争ふやうな成績の拔群なのが多いのでございます。殊にさういふ方の常として容姿も美しく、動作も淑かなので、世間の親だちの目に觸れ易いのですが、病氣と氣付かずに娶りましたら大變で、一二年後に死んで了ふと云ふやうな例は私 が記憶して居るだけでも澤山あります。これは勿論嫁入した相手の罪にもありますけれど、最初嫁を選ぶ用意の足りない罪にもよります。

(三) 性質と身體の似ない同士

世間には身體の全く完全であると云ふ人は稀れで、十中の八九は殊更に病氣といふ名を與へぬまでも、多少は異狀のあるものでございます。身體の健康な人を娶るに増した幸福はありませんが、若し娶る本人も異狀があり、娶られる相手も健康を損つて